映画『殉教血史 日本二十六聖人』と平山政十

――一九三〇年代前半期日本カトリック教会の文化事業

山梨 淳

はじめに

本論は、一九三一年十月に公開された日本映画『殉教血史 日本廿六聖人』（以下、『二十六聖人』）を取り上げ、この作品の製作及び上映の経過を具体的に辿りつつ、満州事変前後の時期における日本カトリック教会の動向を明らかにすることを目的としている。この映画は、当時、日本統治下にあった朝鮮の京城（現、韓国のソウル市）で、牧畜事業を営んでいたカトリック信徒の平山政十（まさじゅう）（一八八〇―一九五八）が、巨額の個人資産を投入して製作した作品である。日活の京都太秦撮影所で製作され、一般向けに公開された商業映画作品であるが、平山のイニシアティブのもと、多数のカトリック教会関係者の協力をえて製作された経緯に示されるように、事実上、日本のカトリック教会の生みだした最初の本格的劇映画というべき性格をそなえていた。作品は、日本やその海外植民地で公開された後、平山個人の奔走によって、北米やヨーロッパでも興行が試みられている。(1)

映画は、一五九七年、長崎で処刑された二十六人のキリスト教徒の殉教の史実によった物語である。当時の代表的な時代劇監督である池田富保が演出を担当し、ペドロ・バプチスタ神父を演じた主演の山本嘉一をはじめ、片岡千恵蔵、伏見直江、山田五十鈴などが出演している。物語は、フランシスコ会のスペイン人神父ペドロ・バプチスタが日本に到着するシーンに始まり、前半部分では、神父らの京都を中心とした畿内の布教活動が描かれている。後半では、スペイン船の難破事件を契機に、豊臣秀吉が、キリスト教布教には同国による日本支配の目的が隠されているという疑惑を抱いたため、教会を弾圧し、神父や信者らが捕縛された末に、長崎で処刑される

ところまでが描かれており、最後に、殉教から約二百五十年を経た一八六二年、バチカンでおこなわれた二十六人の列聖式の場面で締めくくられている。

十六世紀末、日本で最初のキリスト教徒の殉教者をだしたこの迫害事件に関しては、同時代の宣教師によって、西欧世界に報告されて以降、数多くの著書がすでに出版されている。しかし、昭和初期に製作されたこの無声映画に関しては、管見の限り、いまだ本格的な研究は、おこなわれていない。日本キリスト教史の概説書でも、この映画作品に言及されることはまれで[2]、カトリック教会関係者のエッセイ類を別にすれば[3]、近年では、『岩波キリスト教辞典』の項目に採り上げられているのが目立つ程度である[4]。

しかし、以下の論述で明らかにするように、映画界とは無縁の一人の日本人信徒が、教会関係者の支援を受けて実現させたこの映画の製作は、日本のカトリック信徒が、当時置かれていた困難な社会的状況に対して、打開を図るべく実行されたものであり、近代日本のカトリック教会の歴史において、無視できない重要性をもつ出来事であったと考えられる。平山政十は、この殉教映画を、キリシタン時代に対する個人的な関心や、芸術家的欲求に促されて、製作に取り組んだわけではない。「一には国民教化の資料として三百年来の伝統的誤解をとき、二には国外に対する日本国民性の宣伝ともなそうとする[5]」という彼の製作目的の言葉にみられるように、国内の観客に向けては、江戸時代以来のキリスト教徒への偏見を払拭することを目的とし、国外の観客に対しては、日本人信徒の殉教の史実を通して、日本国民の優れた精神を紹介し、日本の対外的イメージを向上することを目指して、この映画は製作されたのである。この点において、このカトリック映画は、語のカトリック的意味においても、また、政治的意味においても、「プロパガンダ」映画（宣教・宣伝映画）であるという二重の性格をもっていた。

一九三〇年代前半期のカトリック教会に関する現在までの研究者の主な関心は、カトリック信徒が、軍国主義化していく日本社会において、社会的な迫害の対象になった出来事（暁星中学と上智大学の配属将校引き揚げ事件、大島高等女学校への迫害運動など）に向けられてきた[6]。このため、『二十六聖人』映画のようなカトリック教会の文化事業に対して、関心が向けられる機会はなかったが、その結果、満州事変直後の時期に公開されたこの映画が、キリスト教の社会一般に認められてきたことの証左として、当時の日本人信徒に、希望を与えていた事実などが従来のキリスト教史研究では閑却されてきたように思われる。

また、この映画の海外興行は、当時、諸外国で悪化しつつあった日本イメージを改善するという日本の国策的な要求に応えておこなわれたものであった。平山政十は、カトリック信徒が、真の愛国者であるということを日本社会において自他に証明せんがために、こ

のような宣伝活動に積極的に従事するに至ったと思われる。しかし、彼の海外興行には、日本のカトリック教会が、後に日本の帝国主義的政策へ協力をしていくことになるその動きに先鞭をつけたという一面がみられたことも事実であった。近年、カトリック教会では、戦前の教会が、なぜ、戦争協力をおこなったのかという問題意識から、この時期の歴史的な再検討が提言されているが[7]、本論は、『二十六聖人』映画の製作と興行という文化事業の考察を通して、満州事変前後の時期、教会がいかに危機の時代に向き合っていたかを明らかにし、この問題意識の一端に応えることを目的としている。そして、この試みは、従来やや一面的に捉えられてきた感のある一九三〇年代前半期のカトリック教会の動向に対し、より陰影をもって捉えることを可能にするはずである。

一、日本カトリック教会と映画

十九世紀末に誕生した映画が、娯楽産業として急速に発展していくなか、欧米諸国では聖書や初期キリスト教時代に材をとった作品が、初期から盛んに製作されていた[8]。これらキリスト教関連の映画は、非キリスト教国の日本にも輸入されていたが、カトリック教会の信者でも、映画に関心のある者は、公開時に熱心に足を運んで、感銘を受けていたようである。カトリック雑誌の『声』には、一九一〇年代から、キリスト教劇映画の鑑賞記や作品紹介が折にふれて掲載されているが[9]、これらの記事では、日本人にとってなじみのうすいキリスト教関連の作品が、一般の観客を集めて、熱心に鑑賞されている事実が、記者の関心を引いており、それらの映画の鑑賞は、「布教上、百の下手な説教よりも遥かに有効である。異教人は楽しみながら、基督教を学び、信者は骨折無しに信仰を養うことが出来る」という点で、評価を受けていた[10]。また、教会関係者が、キリスト教劇映画の自主上映会を行うこともあったようである[11]。

カトリック雑誌の記事では、映画作品が児童や青少年に風紀面で悪影響を与える危険性に関して、注意が喚起されていることが少なかったわけではない[12]。しかし、他方では、俗悪な作品が存在することに目を奪われて、映画を全否定してしまうことの愚を説き、その教育的影響力を認めて、宣教手段として活用することが提言されている[13]。このような主張が行われた背景には、出版や講演活動を中心とする旧来の宣教活動が、大衆化した近代社会では、十二分の成果をもはや上げることができないという教会関係者の現状認識があった。

一九二〇年代後半になると、『声』『カトリック』などのカトリック雑誌に、国産のカトリック映画作品の誕生を待望する記事が現れるようになる。

「わが日本にも真の優秀なる公教映画の作製されんことは甚だ

望ましいのである。殊に、外国映画会社と提携して、切支丹迫害当時の映画の作製することになれば、実にわれには豊富なる多くの材料があるのである。而して、これこそわが日本の真価を世界的に代表するところのものでなければならぬ。」（「映画の全盛時代」『声』六一二号、一九二七年一月、五七頁）

「カトリックにおいても、誰かが映画で宣伝を始めないかなあと、私は日頃から考えているのである。それが単に実写であっては面白くない。文部省の教育映画の如きでは、尚更に失敗で終わるのである。誰も観てくれないから。映画芸術として恥ずかしくない映画を製作して、華々しく世間に問いたいのである。」（岡崎喜蔵「カトリックと映画（三）」『カトリック』八巻、四号、一九二八年四月、二八頁）

「カトリックの精神は、他のどれよりも偉大な劇的要素を、多分に持っているのである。犠牲、博愛、殉教、偉大、等今までの歴史が示す如くに、一番人間の本心に触れた偉大なものが、含まれているのである。」（同上、二九頁）

ここでとりあげた『声』誌の匿名記事では、来るべきカトリック映画が、日本国内の上映で、宣教の役割を果たし、また、その作品の芸術性をもってして、外国の観客に対し、「日本の真価」を訴えることが期待されている。これらの点は、『二十六聖人』の映画化計画において、あらためて製作意図として表明されているのが確認できるが、この事実は、平山が、映画製作を待望するこのような教会関係者の声に影響されつつ、計画を進めていたことによるのかもしれない。『二十六聖人』映画の製作を伝えるカトリック雑誌の記事には、「切支丹もののカトリック的映画化は既に喚ばれていた」という一文がみえるので[14]、教会の中では、この作品の企画が、信徒の従来からの期待を実現化するものとして受けとめられていたことは、明らかである。

昭和初年、キリシタン劇の映画製作が、カトリック教会の関係者の間で、一般的な支持を得る気運は、このように醸成されていたが、もし、平山が、私財を投じて映画の製作に着手することがなければ、この時期におけるカトリック映画の製作は、恐らく実現されることなく終わっていたであろう。朝鮮に在住していた平山が、このような映画の製作を待望する教会関係者の声を、製作に取り掛かる前、直接、耳にしていたのかどうかはわからない。ただ、彼の製作動機には、出身地の長崎教区を取り巻く社会状況が、深く関わっていたように思われる。次章で、平山の伝記的事実を辿りながら、彼が、どのような背景のもと、映画製作に取り組んでいったのかをみることにしよう。

二、平山政十と映画『二十六聖人』の製作

平山政十は、一八八〇年、長崎浦上の隠れキリシタンの家系に生まれた人物であり、彼の伯父と伯母は、幕末から明治初期のキリスト教徒への迫害（浦上四番崩れ）を耐え抜いた敬虔な信者であった。フランスの教育系修道会のマリア会が経営する長崎の英仏語専門学校（後の海星学園）で学び、この間、外国人修道士の教育を受け、フランス語と英語の基礎知識を身に付けたと思われる。一九〇五年から、マルセイユに留学し、一九一〇年に帰朝した後、朝鮮に移住し、父親の始めていた牧畜事業に従事した。事業に成功した彼は、救貧事業などの分野においても活躍することになり、一九二八年、その社会事業の功績が認められて、紺綬褒章を受けている。[15]

一九一九年、朝鮮総督に就任した斎藤実は、「文化統治」の名で知られる植民地経営において、宗教政策を重視し、キリスト教に対して比較的寛容な政策をとっていたが、[16]平山は、この斎藤の厚い信頼を受け、親しい関係を築きあげていた。平山は、斎藤実の序文を掲げて出版した著書『万歳騒動とカトリック教』（長崎カトリック教報社、一九三〇年）で、一九一九年に起こった最初の朝鮮の独立運動である三・一独立運動において、多数のプロテスタントがこの運動に積極的に関わっていたのに対し、カトリック教会が関与せず、日本の統治体制に従順であったことを強調している。[17]斎藤にとって、平山のカトリック信徒という宗教的属性も、一つの評価対象とみなされていたと思われるが、平山のような目立った学歴や人脈を持ちあわせない民間人が、陸軍出身の実力者と懇意になりえたのは、植民地という本土とは異なった環境が大きく与っていたと考えられる。

斎藤は、『二十六聖人』映画に関しても、平山に惜しみない援助をしていた。作品の公開時、この映画の賛助者には、現首相の若槻礼次郎、前首相の浜口雄幸、政友会総裁の犬養毅などの政界の実力者が名を連ねていたが、これは、政府高官らを映画の賛助者に加えたいという平山の依頼を、斎藤が聞き入れて、実現されたものと思われる。[18]平山は、一九三〇年、映画ロケのためローマへ出発する前、「既に日本では斎藤朝鮮総督、濱口首相、幣原外務、牧野内大臣、若槻全権、其他朝野有力者の熱誠な声援を得ているので、きっと望みを達しうるであろう」と語っているが、[19]ローマで、彼がムッソリーニと面会することができたのは、斎藤の人脈を介して、現地の日本政府関係者の協力をえることができたからであろう。当然のことながら、斎藤は、『二十六聖人』映画の完成時、試写会に招待されている。[20]また、平山は、一九三一年十二月、映画興行のために渡米する前、ベルギーの京城駐在の名誉領事に就任しているが、これも斎藤の推挽によるところが大きかった。[21]首相在任中にも、平山が滞欧中に苦境に陥った時、彼に経済的援助の手を差し伸べているが、[22]これらの平山に対する並はずれた好意は、斎藤の彼への評価が相当

高かったことを示している。

朝鮮の一事業主だった平山が、『二十六聖人』映画の製作を志した動機は、彼自身の語るところによると、映画製作の四年前、十年ぶりに戻った長崎で、伯父の守山甚三郎から、浦上信徒の受けた迫害の体験談を聞く機会があり、その時に受けた感銘から、過去の日本人カトリック信徒の事績を映画で広く紹介しようと思いたったことにあるという。[23] この時、平山が、出版というありふれた手段をとらずに、あえて劇映画の製作に臨んだのは、彼が、宣教手段としての映画の可能性に注目していたからに他ならない。

映画公開の一年前にあたる一九三〇年に発表されたあるカトリック雑誌の記事には、平山が、「カトリックが大衆と風馬牛なるを慨し、多年、教会有志の間に映画作成のことをはかっていたが、長崎司教の御奨励、信者有力者間の助言献策を得」て、「日本の殉教者」映画に取り掛かっていることが報じられている。[24] この記述から、平山が、映画を一般大衆に対する宣教の有力な一手段とみなしていたこと、そして、郷里の長崎教区で、教会関係者の協力を得ながら、映画製作の計画を進めていたことがうかがえるが、では、なぜ、当時の長崎のカトリック信徒らが、平山の計画に「助言献策」を与えていたのだろうか。その理由は、長崎のカトリック教会をとりまく状況が当時、悪化しており、その状況を打開することが、彼らの重大な課題になっていたためと考えられる。

長崎教区では、平山の母校の海星学校は、一九二八年の式年遷都祭の時、伊勢神宮への遥拝式の実施を拒否していたため、保守的勢力から、不敬行為として攻撃を受けていた。[25] このような国体擁護、愛国主義の立場からなされるカトリック教会への排撃運動に対し、長崎司教の早坂久之助らは、教区の機関誌『長崎カトリック教報』において、神社参拝の強制を「示威的、野望的な軍国主義の全国的表現」とみなし、果敢に批判を行っていた。[26] このような中、カトリック教会を取り巻く状況に危機感を抱いていた教会関係者は、カトリックに対する国民の偏見をなくす有力な手段として、平山の映画製作に期待を寄せていたのではないだろうか。平山が、映画の製作動機の一つに、日本人のカトリックに対する偏見を打ち消すことをあげているのは、このような長崎教区の状況とは、無関係ではありえなかったであろう。

しかし、平山は、映画の完成前に、このような国内向けの上映目的だけではなく、外国での作品上映によって、日本イメージの向上を図ろうとする彼の目標を語っていた。[27] 海外興行から帰国後、一九三四年に大阪の教会で行われた講演でも、彼は、映画の製作目的が次のようなものであったことを聴衆に語っている。[28]

「今日程、世界の眼が我日本に異常な関心を以て注がれている時はない。今日程、我国情の真諦を欧米諸邦に正しく伝える事

の必要なるはない。此の世界的宗教映画「日本二十六聖人」製作とする処は、一、カトリックに対する国民の誤解を解くこと、二、国民の思想善導に資し度き事、三、日本国民の特質美点を世界に示し、国際親善に貢献する事、実に此処にあるのであります。」

二番目にあげられた「国民の思想善導に資し度き事」という製作目的には、カトリックこそが、日本の道徳を再建しうる真の宗教と考える、信者としての彼の主張をうかがうことができる。しかし、なぜ、カトリックの劇映画が、海外上映によって、「日本国民の特質美点を世界に示し、国際親善に貢献する事」を目的の一つとして、製作されなければならなかったのであろうか。

われわれは、それを、当時、日本のカトリック教会の置かれていた困難な状況に対する、信者としての一つの実践的な対応策であったと考える。周囲から非国民扱いされることもあったカトリック信徒は、非難と迫害から免れるために、自分たちが、国賊どころか、むしろ優れた愛国者であることを世間に知らしめないといけないという課題を負わされていた。例えば、当時、長崎教区の神父であった脇田浅五郎（登摩）は、その著作『日本国体とカトリック教』（佐世保カトリック教会、一九三〇年、五九―六〇頁）の中で、次のように述べている。

「回顧すれば、三百年と云う長い久しい間、迫害に迫害を、嘲笑に嘲笑を、侮蔑に侮蔑を、謂われもなく、加えられ来たった、我等ではある。然し、それを恨みに思ったり、僻みを起したりする如き狭量であってはならない。（中略）寧ろ自ら進んで、カトリック教者が、どこまで国家社会のために、忠誠の至情に燃えつつあるかを表明し、実証すべきであろう。」

後にみるように、平山は、この『二十六聖人』映画を携えて、欧米に約二年間、滞在しているが、その活動は、祖国への献身的な奉仕によって、カトリック信者が、真の愛国者であることを自らの身を以て証明しようとする試みとして、行われていた。このように、『二十六聖人』映画は、キリシタン時代への歴史的な関心から製作されたという作品では決してなく、当時のカトリック教会のおかれた社会的立場を改善し、世間のカトリックへの偏見を取り除くという、実践的意図のもとに製作された宣教・宣伝映画であったのである。

しかし、平山の映画製作には、以上にみた教会をとりまく社会情勢だけではなく、カトリック教会の内部事情も、関わっていたように思われる。カトリック劇映画がまだ製作されたことのない日本で、一九三〇年頃に国際的なカトリック映画の製作が目指されたことの

背景には、一九二七年、長崎教区における初の日本人司教の誕生をうけ、この時期の日本人信徒が、西洋の宣教師が主導してきた司牧体制から自立しつつあるという自覚をもつようになっていたことと恐らく無縁ではないように思われる。当時の『カトリック』誌の巻頭言に、「自国は自国人の血や汗や、犠牲や献身によって救わなければなりません。そこに愛国的使徒たる精神がもとめられます」（「国人司教の任命」『カトリック』七巻、九号、一九二七年九月）、「日本カトリック教徒は、その信仰を受身消極的にのみ解し、逃避的傾向があった。（中略）各自が大カトリック教会建設のため、有機的組織の一因子として新時代の創造に分与すべきである」（「新時代の創造」『カトリック』八巻、一号、一九二八年一月）という主張が唱えられているように、幕末の再宣教の開始期から約七十年を経て、この時期の日本人信徒は、西洋先進諸国の信徒に伍すカトリック信徒に成長するに至ったという高揚感をもっていたように思われる。そして、自主独立の気概を持ちつつあった日本人信徒は、今まで宣教師を派遣してきた西洋諸国のカトリック教会に対して、自己を主張したいという潜在的な願望を持っていたのではないであろうか。恐らく、この平山も、日本のカトリック教会に欧米の傑作映画に匹敵する作品の製作が可能だということを世界の教会関係者に向けて知らしめたいという愛国者的欲求とは無縁に、映画の製作に臨んだわけではなかったであろう。

この映画の主題になったキリシタン迫害事件は、明治時代より教会劇で取り上げられており[29]、平山も幼少期より親しんでいた殉教史話と思われるが、彼は、この史実を映画の題材に選んだ理由として、「世界的に知られた」殉教であるというその知名度の高さをあげている[30]。宣教・宣伝の手段として映画が製作される以上、作品は、多くの人々の目に触れなければ意味をなさず、興行的成功が重視されることになったのは、当然の成り行きである。また、平山は、「出来上がりの暁は之が版権を長崎教区に譲り日本全国は素より海外にまで紹介し、収益あれば全部教会事業に献ぐる由である」という抱負を述べていたが、このような経済的動機も、知名度の高い題材が選ばれることに関わっていたであろう[31]。恐らく、日本国内の観客のみを対象にして製作される映画であった場合、必ずしも題材は、二十六聖人の殉教である必要はなかったかもしれないが、企画当初から、欧米での興行的成功が目指された結果、この史実が選ばれることになったのだと思われる。

また、キリスト教徒の「殉教」劇が題材に選ばれた理由としては、日本に関して知識を持たない西洋キリスト教諸国の観客に対しても、受け入れられやすい主題であり、日本人の国民性を紹介する目的をもった宣伝映画の主題として、適切なものであると判断されていたことが考えられる。そして何よりも、平山は、この殉教事件に、「吾が同胞祖先の国法に従順なる精神と、信ずる者の為に身命を献

げる武士道、即ち大和魂の美質を極度に発揮したるものとして、無条件で全世界に誇示すべき大史実」を認めていた。[32] 武士道精神を強調する日本国民性論は、外国に向けた日本イメージの宣伝工作の一手段として、すでに日露戦争の時より、日本軍に利用されていたが、[33] 平山の海外興行は、映画上映を通して、日本人の優れた国民精神を訴えることを目指した点において、このような武士道を用いた「日本」宣伝の系譜に連なったものであったということができる。[34]

他方、平山には、日本国内の観客に向けても、「殉教」という行為の描写を通して、カトリック信徒の一般的イメージを好転させようという意思があったことは、間違いがない。殉教は、キリスト教信者にとって、主イエスの受難にならう賞賛されるべき行為であるが、他方、反キリスト教的な立場に立つ為政者にとって、棄教することよりも、死ぬことを選ぶ信徒の殉教は、不服従を示す反抗的行為として受けとめられた行動でもある。このような主題を映像化することは、一部の日本人の反感を買う恐れもあったであろうが、平山は、あえて日本におけるキリスト教徒の殉教を、武士道における「殉死」と結び付けることによって、日本人の美徳観念との同質性を主張し、一般の人々に受け入れられるべく、キリスト教徒を、「国法」に忠実で、かつ死をも恐れない勇気をもつ人々として示そうと試みたと考えられる。

そして、平山は、映画で殉教者らの過去の悲劇を紹介することによって、日本で彼らが長年に亘って被ってきた歴史上の汚名をそそぐことを願っていた。彼が映画の製作動機を語った文章に、「今から三百年前に、廿六殉教者に対してわれわれの祖先は罪なき人達を子供まで迫害したのですが、現在その子孫であるわれわれがこれを陳謝して、これらの聖人達を厚く尊敬せねばならぬのではないでしょうか」という一文があるように、彼は、日本でキリスト教会がはじめて迫害を受けた時期に遡って、日本の信徒の無辜を訴えようとしたのである。[35]

映画製作の計画段階では、当初、キリシタン史の専門家である明治大学教授の松崎実と作家の佐藤紅緑の共同製作になる脚本で、映画が撮影される予定であった。[36] また、築地教会の伝道士の石川音次郎が、映画の演出に協力をする予定であることも報じられていたが、この石川は、教会の聖劇のベテラン演出者であった人物である。一九三〇年当時、東京大司教区では、彼を中心に、長崎の二十六聖人殉教地へ巡礼する運動が開始されており、平山との関係も、この時に結ばれていたのかもしれない。[37]

映画完成の一年前の時期、この映画の製作予定を紹介する記事では、タイトルは、「日本の殉教者」(『光明』七一六号、一九三〇年二月二十三日)、「切支丹哀史」(同上、七五〇号、一九三〇年十月十九日)などと様々な名称でよばれているが、この時期、映画が日活の下での製作になることが、決定したようである。先にわれわれがみ

た『カトリック』誌に掲載された映画論では、カトリック映画の監督は、カトリック信徒である必要があるというような理想論が唱えられていたが[38]、平山が、日活に『二十六聖人』映画の製作を委託したことは、カトリック映画を、信者ではない監督や役者の力を借りて、製作していくという現実的な方向が選ばれたことを意味する。ただ、彼は、後に、商業映画会社に作品の企画を認めさせることが困難であったことを語っているので、日活との契約が成立するまで、短くはない交渉の時間を要したことと思われる[39]。

平山は、松崎実と佐藤紅緑との共作脚本が長崎教区の早坂司教から校閲と認可を受けた後に、ローマ・ロケを敢行しているので、彼自身は、一時期、これを完成版とみなしていたと考えられる。それにもかかわらず、この脚本は、平山のロケからの帰国後、何らかの事情で却下され、映画は、上智大学教授のヘルマン・ホイヴェルス神父による新脚本（東京大司教の認可を受けている）で、製作されることになった。松崎・佐藤の共作脚本が、日活の映画専門家の意見をいれて、不採用とされるにいたった可能性もなしとはしないが、より考えられる理由の一つとして、信者ではなかった佐藤紅緑に対する不満が教会内に存在し、その脚本参加に対し、異議が唱えられていたであろうことである。

佐藤紅緑に、当初、脚本協力が依頼されたのは、彼が「キリスト」劇の作者であったことと無関係ではないであろう。佐藤は、沢田正二郎の脚本依頼で、一九二七年末、『キリスト』を執筆し、作品は、新国劇一座によって、東京の本郷座で上演されたが、この初演は、大変な不入りだった[40]。約一年後の一九二八年十二月、沢田は、帝劇で、この「キリスト」劇の再演を試みたが、この度は大入りで、初演の雪辱を果たしている[41]。カトリック教会でも、演劇に関心をもつ人士は、この上演に無関心ではいられなかった模様であり、岩下壮一は、当時、発表していた公教要理の解説で、佐藤の「キリスト」劇の公演を見に行く「暇人の一宣教師」のいることを紹介している[42]。また、『声』誌の編集員で、カトリック文学者であった藤井伯民は、初演と再演の二回、この作品を観劇しているが、それぞれの機会にこの劇を取り上げ、そのキリスト教に対する無理解に対して批判を行っていた[43]。このように佐藤紅緑は、「キリスト」劇の作者として、カトリック教会でもその名を知られていたが、彼のキリスト教理解に、感心しない信徒も少なくはなかったであろう[44]。ローマ教皇による「後援」が決定した後、あらためてその映画の脚本提供者として、彼が不適当とみなされ、教会の中で反対の声があがるようになったとしても不思議ではない。

平山個人に佐藤紅緑との接点があったとは思われないので、松崎実かその周辺の人物を介して佐藤に脚本協力への依頼がなされたのであろう。恐らく、平山が、脚本作成者を求めて最初に依頼を働きかけたのは、カトリック信徒の松崎であると思われるが、その考え

られる理由の一つとして、彼が、エメ・ヴィリオン神父の『鮮血遺書』の校訂版（『考註・切支丹鮮血遺書』改造社、一九二六年）を出版していた人物であったからである。この『鮮血遺書』は、日本の殉教者を描いた列伝で、一八八九年、ヴィリオンが、伝道士の加古義一などと協力して、出版した著書である。内容は、フランス人の東洋研究者レオン・パジェスの「日本切支丹宗門史」「日本二十六聖人殉教記」などの日本キリスト教史の著作に依拠するところが大きい。のちに専門研究者によってキリシタン史研究が本格的に行われるようになるまで、パリ外国宣教会の宣教師による著作が、キリシタン時代に対する日本人の歴史的関心を満足させてきた功績は、無視できないものがあったが、なかでも、『鮮血遺書』は、戦前、恐らくもっとも広範な読者を獲得し、一般に名前を知られた書物であった。

松崎実は、『鮮血遺書』の校訂版の出版の他、自身でも『切支丹殉教記』（春秋社、一九二五年）の著書を出版していたキリシタン史研究者で、吉野作造を会長とする明治文化研究会の同人の一人であった。また、彼は、自伝的小説（『扉：創作 地獄篇』春秋社、一九二四年）を執筆し、カトリック雑誌に文芸作品を掲載している文学肌の人物でもあった。このような信者であったため、彼は、この映画の企画の協力者として、教会内で最も適任の人物であるとみなされたのであろう。しかし、完成作品のクレジットからは、佐藤紅緑と同じく松崎実の名前も、消えてしまっている。最終的に、松崎は、歴史考証の監修者という立場でも映画に関わることがなかったが、それは、脚本が不採用になった以上、佐藤への義理もあり、この映画への協力を取りやめたからなのだと思われる。

興味深いことに、平山のローマ・ロケを境に、演技指導の担当者も、予定されていた伝道士の石川音次郎から、フランシスコ会のエジド・ロア神父（鹿児島教区長）に替えられている。これらの変更において、確認出来ることは、脚本や演技指導の担当者が、日本人の信者、伝道士、教外者から、外国人神父に変更されていることである。いわば、平山の渡欧を機に、日本の教会の代表的な神父が、映画製作陣に加わることになったわけであるが、それは、教皇と面会を果たした平山の帰国後、日本カトリック教会の上層部が、この映画の製作に全面的協力をすることに合意したからなのではないかと考えられる。特に、ホイヴェルスとロアの両神父は、それぞれ殉教者らの所属していたイエズス会とフランシスコ会の神父であり、両者の映画製作への参加は、この作品にカトリック教会の記念映画としての正統性を付与することになった。また、両神父の参加は、この映画の海外興行時に、平山が現地のフランシスコ会とイエズス会から好意を得ることを可能にすることになる。

新脚本者となったホイヴェルスは、一九二三年に来日したドイツ人のイエズス会神父で、この映画の脚本の執筆をきっかけに、後に

も、キリシタン時代に取材した劇を製作している。[45] 彼は、学生時代から、劇作に興味を抱いていた人物で、この映画の脚本に関わる少し前、『カトリック』誌に、受難劇を発表していた。[46] また、一九二八年の同誌には、ホイヴェルスが、ルイス・フロイスの『日本史』の日本語訳の監修を務めることが報じられていることが確認できるが、[47] 彼に映画の脚本の依頼がなされたのは、このような彼の劇作への造詣と、キリシタン時代に関する知識が評価されたためと思われる。

なお、この映画のクレジットには、「原著作」として、ヴィリオン神父の『鮮血遺書』の名があがっている。「原著作」とは、ホイヴェルスが、この本を参照しつつ、映画の脚本を作成したという意味である。しかし、『二十六聖人』映画の製作時、この『鮮血遺書』に、誤謬が多く含まれていたことは、松崎実の校訂作業などを通して、教会内外では、当時、すでに周知のことになっていた。[48] 松崎が、『鮮血遺書』の原典であったレオン・パジェスの「日本二十六聖人殉教記」の訳稿を、仏文学者の木村太郎と協力してあらためて作成したのも、『鮮血遺書』を校訂するだけでは、満足な水準の著作を出版することができないことを悟っていたがためである。このパジェスの原典からの新翻訳が、映画公開時に、『日本廿六聖人殉教記』（岩波書店）として出版された時、『日本カトリック新聞』（三二四号、一九三一年十二月二十七日）には、「教皇使節、東京大司教『日本廿六聖人殉教記』を一般信者に推薦」という記事が掲載されたが、そのアレクシス・シャンボン東京大司教の推薦の辞には、「ヴィリヨン師編する所の『鮮血遺書』は大いに流布されてはいるが、吾人はなお、現代の読者の要求するが如き専門的研究を以て編纂され、殊に最近の新発見によりて一層精密に検討されたる史実の著されん事を要望して止まなかった」という一文がみえる。ここに明らかなように、カトリック教会では、『鮮血遺書』を「伝道の書籍」として出版することは認められていても、この本を正統的な歴史書として信者に推薦することは、教会指導者の間でも既に躊躇されるようになっていた。

ホイヴェルスが、欧文の同時代資料や研究文献を通して、キリシタン時代の史実の知識を得ることができた人物であることを考えると、彼が、脚本執筆の際、あえてこの『鮮血遺書』を実際の参考にしていたとは考え難いところがある。また、ホイヴェルスは、イエズス会の管轄下にあった広島教区で新人時代を過ごしていた当時、萩教会の司祭であったヴィリオン神父と知り合う機会をもったことを後年、回想録で触れているが、この老神父をキリシタン史研究者の先達とみなしていた様子はその回顧の文からはうかがえない。[49]

恐らく、『鮮血遺書』が、この映画の「原著書」とされている事情は、この著書が、大正末期からのキリシタン時代に関する一般の興味の高まりとともに、日本キリシタン史の代表的著作として人口に膾炙されていたため、興行上の宣伝効果の観点から、その知名度

の高さが評価されたためと考えられるが、また、それだけではなく、平山の個人史的事情も関わっていたのではないかと思われる。日本二十六聖人殉教の事績に関する彼の知識は、他の多くの同時代者と同じく『鮮血遺書』を通して得られたものであったであろう。そして、何よりも、著者のヴィリオンは、幕末に来日して、浦上四番崩れに立ち会った宣教師であり、この映画の製作の機縁となった平山の伯父とも、旧知の仲の神父であった。[50]『鮮血遺書』には、二十六聖人の殉教と同じく、この浦上信徒の受難も扱われているので、平山には、思い入れの強い本であったことに疑いはなく、恐らく、以上の理由から、本書は、仮構の「原著書」にあげられることになったと推測される。

一方、ホイヴェルスが、脚本の執筆にあたって、松崎・佐藤両名の共作になる旧脚本を参考にしていたかどうかはわからない。ただ、彼に脚本の依頼がおこなわれた時期、平山はすでにローマ・ロケを終えていたことから、物語の筋の基本線に関しては、平山の意向を反映するものであったと思われる。[51]また、監督の池田富保が、脚色に関わっていたことを考えると、ホイヴェルスの作成した脚本は、原案に近いものであったという可能性もある。少なくとも、撮影台本に確認できる、勧善懲悪的な剣劇シーンなどは、池田自身の手になるものであろう。[52]ホイヴェルスは、後の回想録で、この映画の京都ロケを見学したときのことを書いているが、その部分の回想は、自作の映画化に立ち会った脚本家の感想とは思われないほど淡泊なものであり、彼は、この映画作品に対して、特に自作という意識を持ち合わせていなかったように思われる。[53]

先に述べたように、平山は、映画本篇の撮影前に渡欧し、この映画のラスト・シーンを飾る、ピウス九世による二十六人の殉教者の列聖式の場面のフィルムを製作していた。現地に不案内の平山は、バチカンに留学中の日本人神学生たちの援助を受けることができたが、その中の一人の志村辰弥（後の東京大司教区司祭）が、当時、『声』誌に寄せていたローマ便りで、平山の活動を報告しているため、われわれはそのロケの経緯を知ることが出来る。[54]その通信文によると、平山は、教皇ピウス十一世に謁見し、激励の言葉を賜わることができたが、聖ピエトロ大聖堂で、イタリア人俳優を使って、列聖式の場面を撮影するという、彼の希望は、教会内での撮影が禁じられているために、実現することがかなわなかった。そのため、聖堂外部の光景は、祝祭日や記念祭などの折に撮られていた過去の断片的フィルムを借用し、また、聖堂内部の場面は、既成の写真を用いるという、ありあわせの編集処理を余儀なくされたという。ただ、殉教者二十六名の肖像を持った行列行進の場面に関しては、日本人神学生らが学んでいたプロパガンダ大学の神学生約百名の協力を得て、オリジナル・シーンを撮影することができた。[55]この通信を送った志村は、現地で平山の映画ロケに関わった人物であるので、

その情報の信頼性は高い。[56]

平山は、当初予定していたロケの計画が崩れて、落胆したことと思われるが、帰国後、自身の渡欧について、その点には触れず、「幸いにもローマ教皇庁の特別なる援助と、伊国主宰ムッソリーニ閣下の肝いり、ローマ市民の総動員的な声援との下に、予期数倍の大成功を獲得して帰朝するを得た」と語っている。[57] この記述は、志村の通信文が伝えるロケ事情とは異なる印象を与えるが、平山としてははるばるローマにまで行ってロケを挙行した末に、予定通り撮影が進まなかったということでは、周囲に対して格好がつかなかったであろうし、また、映画興行の成功を願う一心で、ロケの成果を強調せずにはいられなかったのであろう。

恐らく、ローマ市民から「総動員的な声援」を得たという類の曖昧な言葉遣いが、読み手の誤解を招いたのではないかと思われるが、彼のローマ・ロケに関しては、当初、十一万人のローマ市民が参加したとカトリック雑誌（『光明』）で報じられ、[58] 映画の公開以降には、二十万人のローマ市民がエキストラでロケ撮影に協力したと紹介されている例が多数確認できる。後者に関しては、一八六二年の列聖式に二十万人の人々が参加したことについての記述が、映画のロケ協力者に関するそれと混同されてしまったものと思われるが、後には、この「誤解」が流布してしまったため、平山は、いまさら否定することもできず、彼自身もそれを踏襲する以外に他なくなっていたようである。[59]

平山の果たした教皇ピウス十一世やイタリアの首相ムッソリーニとの面会は、社交儀礼的な性格のものに過ぎなかったであろうが、彼が、両者から映画製作の激励を受けたことは、前者の「後援」、後者の「賛助」という形で、映画を宣伝することを可能にした。『キネマ旬報』（四一一号、一九三一年九月十一日）に掲載された公開予告の広告には、洋画ファンを意識したものなのか、ムッソリーニの肖像のイラストが掲載されている。[60] このようなローマ・ロケの成果を強調していた宣伝は、当時の邦画界では稀な「国際的大作」という印象をこの映画に与えることに成功していた。[61]

この映画の国内での撮影は、平山のローマからの帰国後に開始された。監督をつとめた池田富保は、当時、春と秋の二回、特別公開されるオールスター映画と呼ばれる大作の演出を担当していた人物である。[62] 池田自身は、カトリック信徒ではなかったが、殉教者の生き方に感銘を覚えて、強い製作意欲を抱いていた。また、出演した俳優達も、殉教という主題や、映画の国際的性格に、今までの作品にはみられない新鮮さを覚えていたようである。[63] 撮影中には、教会関係者も、エキストラでの出演や裏方の作業に積極的に参加していた。[64] 撮影佳境の五月には、撮影現場の見学希望者も多く、作品は、完成前から、カトリック教会で大きな期待を集めていた。[65]

三、『二十六聖人』の国内上映とその反響

映画の完成後、一九三一年九月中旬から、関係者や招待客を招いて、試写会が上映され、十月一日より、一般公開された[66]。一般新聞各紙は、封切り時、総じて好意的な映画評を掲載し、商業映画会社の作品が宗教という主題を扱った点に、画期的な新しさを認めていた[67]。当時の評は、バプチスタ神父を演じた主演の山本嘉一の演技力とメーク・アップ技術を評価し、撮影監督の酒井宏のカメラ・ワークや子役の演技を称賛している点で、おおむね共通している。なかでも、矢田挿雲が、「ラブシーンの一つもない長編物を、これほど見せるのは、史的興味と宗教的興奮とにもよるが、主として子供の持つ神聖が、ひきつけるものらしい。近来になく、清らかな涙の流せるのがうれしかった[68]」と書いているのは、恐らくこの作品に対する最高の賛辞である。

もっとも、批評家に不満が持たれていなかったわけではなく、物語的に、来日した神父らの宣教活動からなる前半部分と、神父と信者らが迫害を受け、殉教する後半部分との連関に説明不足の感を抱いていた批評がみられる[69]。『キネマ週報』（八二号、一九三一年十月九日、一二頁）の批評は、監督の池田が、「例によって字幕で進めるイージーゴーイングな仕事をしている」と指摘し、この作品に、劇的な力を認めながらも、「殉教の気持にもっと必然性を持たせたら」良かったと評している。

このような同時代の批評家が指摘していた問題点は、恐らく、作中の豊臣秀吉の描き方に起因していたと考えられる。この作品の前半部では、秀吉が、カトリック教会に対し、好意的な人物であるという描写が、繰り返しおこなわれている。カトリック神父らの活動に敵意を覚えた仏教僧が、彼らに対して中傷を試みた時、秀吉が怒りを以て反発を示すというエピソードすら挿入されている。しかし、実際の史実では、すでにこの殉教事件の九年前、秀吉は、伴天連追放令を出しており、彼が、キリスト教に対し、本質的に理解を抱いていたとは考えられない。だが、この映画では、そのあたりの歴史的背景の説明は全くおこなわれないため、当初、秀吉から好意的な待遇を受けてきた神父らが、突然、彼の怒りを買って、過酷な迫害を受けることになってしまったという理不尽な感を観客に与えてしまうことになったと思われる。このような映画作品における秀吉の人物像の設定は、「原著作」の『鮮血遺書』が、秀吉を一貫して反キリスト教的な暴君として描いていたことと好対照をなしている。

しかし、この映画の前半部で、秀吉がカトリック神父らの優れた人格に敬意を抱いていたことが強調され、キリスト教徒への迫害が、秀吉の早まった「誤解」の結果、引き起こされることになったという演出が行われたことは、平山の製作動機から、当然にして求められたことであった[70]。カトリック教会への弾圧が、作中、このように

秀吉の「誤解」の結果によるものとして描かれる必要性があったのは、もし、それでなければ、日本の「為政者」が、カトリック教会の存在に対して、本質的な批判を抱いており、キリスト教が、日本の国制になじまない宗教であるというメッセージを作品が含意してしまいかねないからである。

豊臣秀吉が、教会の事業に理解をもつ「為政者」として登場する一方、この作品において、カトリック信徒らは、善良で、忠実な「臣民」として描かれている。物語の後半部で、たとえ「誤解」の結果発せられたものであれ、「為政者」の刑死の命を忠実に受け入れようとする信徒の姿が描かれることになったのも、殉教者の「臣民」としての忠良な性格を強調しようとする製作者の意向が、この映画で彼らに何らの批判的言動を行うことを許さなかったがためである。それは、勿論、キリスト教徒が日本の国制に順応する存在であることを、観客に対して示し出す必要があったからであった。秀吉とカトリック信徒の関係において、このような描き方が行われたため、前記の批評の指摘にみられるように、この映画の前半部と後半部がうまく接合されておらず、その結果として殉教者の気持ちの描写に十分な説得力が感じられないという印象を観客に与えることになったと思われるが、その原因は、すでに平山の製作動機の中に胚胎していたということができる。

大多数のカトリック教会関係者のこの作品に対する評価は、非常に高かった。シャンボン東京大司教は、「私は、今まで日本において嘗てかほど立派な映画を見たことがありません。又私が最も感心したことは、キリスト教感情の完全に表わされていることで、ある場面などは誠に骨髄にまで透る程であります」と述べており[71]、その他の神父も、カトリック映画として、完全な作品と折り紙をつけていたと報じられている[72]。

興味深いのは、『日本カトリック新聞』の論説が、この映画作品の公開に関して、日本のカトリック教徒に国民的意識を想起させる点において意義があると述べていることである[73]。この論説は、カトリシズムが、普遍的な世界的宗教であると同時に、国民的特性をもつことを妨げないことを述べ、日本人カトリック教徒にとって、二十六聖人は、アイルランド人にとっての聖パトリック、フランス人にとっての聖ジュヌヴィエーヴやジャンヌ・ダルク、ドイツ人にとっての聖ボニファティウスに相当するような存在であることを指摘する。そして、「われらは、わが国のカトリック教徒が、この雄大なる日本精神を失わずして、信仰に邁進せんことを、求むること切なるものがある」と主張するこの論説には、西洋諸国のカトリック信徒と同等の位置に立とうとする、日本人信徒らのナショナリズム的な意思を読みとることができるであろう。また、このような主張は、二十六聖人殉教に、「大和魂の美質を極度に発揮」した性格を認める平山の見方が、教会内でも共有されていたことを示している。

一九三〇年代初頭のカトリック教会で、キリシタン殉教の日本的性格が強調されている事実は、当時の日本人信徒が、自己のアイデンティティをカトリシズムの普遍性の中に解消させることなく、自らの「日本人」性を積極的に訴えることによって、国民として日本社会への一層の同質化を望んでいたことのあらわれであろう。

映画の公開中、日本カトリック新聞社の編集部に、全国各地での興行を支援する臨時の特別事務室が設けられた。そのため、『日本カトリック新聞』には、公開時から年末にかけて、各地方における上映状況とその反響を伝える数多くの通信文が掲載されているが、その大部分の記事は、この映画が、各地の映画館で、一般の観客を多数集めて、感動させていることを伝える記事である。しかし、一部には、この映画に対して批判的な文章も、この新聞に掲載されていないわけでもない。信者ではなかったが、カトリックに理解の深い宗教学者として、教会でも尊重されていた姉崎正治は、試写会に招待されていたが、映画の出来ばえは彼の期待を裏切るものであったらしく、カトリック新聞社に不満点を指摘した手紙を投書している。「姉崎博士よりの来信」（『日本カトリック新聞』三一三号、一九三一年十月十一日）として掲載されたその文章で、彼は、「映画としてのエフェクトは別として、又必ずしも歴史史実にのみ拘泥するのではありませんが、余りに杜撰な点があり、教会の方々があれに誤られる事を憂えます。聖堂の門に「南蛮寺」という標札ある如き、余りに愚な事と存じます。日付は陰暦と陽暦とを混じて誤ったものの」であると史実面の不十分な考証を指摘し、この事実を「教会の方々は誤りなくお伝えあるべき」で、「新聞で然るべくご注意あるべきでないでしょうか」と苦言を呈している。

この他にも、『日本カトリック新聞』には、演出や編集面での拙劣さに不満を述べている、匿名批評が掲載されていることが確認できる。[74] この批評の掲載後、次号の同紙紙上には、別人の匿名批評が掲載され、この前出の匿名評者の批評が不適切であることを指摘し、その著者を「修道志願者」だという断りがなされているが、[75] 当時、カトリック新聞社の編集部が、映画の全国事務所を兼ねていたことを考えると、単なる不注意から、この映画評の掲載が許されたとは考えにくく、編集部は、この批評に発表価値を認め、意図的に掲載がおこなわれたのだと思われる。この映画が、ローマ教皇の「後援」を受け、神父らが製作陣に加わっていた以上、表立ってこの作品に批判を加えることが、教会の信者に憚られたことは当然のことである。まして、公式的には、この映画を絶賛せざるをえない立場におかれていたカトリック新聞社の編集部は、匿名批評の掲載という形を隠れ蓑にし、作品に対する不満を表明していたのではないだろうか。高尚な芸術味を期待していたインテリ信徒には、作品にみられる大衆講談調の時代劇スタイルに、内心失望を感じていた者もいたのかもしれないが、無論、このような批判は、作品に寄せられ

た期待の裏返しでもあったであろう。

もっとも、このような批評とは関係なく、各地方の信者は、当地での映画の上映を心待ちにしていた。『日本カトリック新聞』の記事などからは、各地の神父や信者らが、この映画の公開時、ビラやポスターの製作、前売り券の販売、上映会でのリーフレットの配布などから、地元新聞社への記事掲載の働きかけまで、カトリック映画の上映協力に奔走している様が伝わってくる。四国教区発行のカトリック雑誌（『子羊』）の記事によると、当地では、カトリック用語に不案内な活動弁士に対して、伝道士が適切な読み方の指導を行っていた。[76] 映画の公開時には、上映の合間に、神父や伝道士らがキリシタン時代の史実の解説やカトリックの講話を行うなど、宣伝布教に努めていたことも、多かったようである。

当時、日本のカトリック教会では、一般信者にも聖職者を支援して積極的な布教活動への参加を求める「カトリック・アクション」（公教運動）が呼び掛けられていたが、[77] この映画の上映は、全国的規模で、神父と信者らに、布教という集団目標を与え、一般の注目を浴びる場で、その実践の機会を提供することができたのである。「キリシタンに対する伝統的先入の偏見によって不成功におわりはせぬだろうかとの懸念もあった、然るに（中略）公開されるや毎回満員の盛況であった」という長崎のある信者の報告には、日本社会で宗教的少数派として生きてきた信徒の自意識を読みとることができると同時に、カトリック映画が、一般の観客に鑑賞されていることに信者が率直な喜びを覚えている様が伝わってくる。[78] 当時の記事では、一般信者にも、隣近所の未信者の一人でも多く誘って観覧させることが、勧められており、また、各地のカトリック系学校では、生徒や父兄を対象にした映画鑑賞会が実施されていた。地域によっては、プロテスタント教会側も、カトリック映画だから忌避するという狭量な姿勢をとらず、この映画の上映に協力的な対応をみせていたが、ある札幌在住のカトリック信者の報告によると、その地の前売り券の販売成績は、プロテスタント側の販売枚数が、約一万枚なのに対し、カトリックのそれは、二千五百枚ほどであったという。[79] 地域差もあったにせよ、カトリック教会関係者による動員力に、限界のあったことは事実である。

それでは、宣教映画としての役割が期待されていたこの映画は、当時、どれだけの観客を集めていたのであろうか。『二十六聖人』映画の興行に関して、公開当時に作品を鑑賞していた御園京平氏は、浅草のある映画館（浅草富士館）で、二週間の公開予定のところが、一週間で上映が打ち切られてしまった例をあげ、この映画が意欲作でありながら、興行面では不振に終わったことを指摘している。[80] 浅草の映画館での不入りは、この映画が当時の平均的な一般大衆の支持を得ることができなかったことを示しているが、しかし、当時の一般ジャーナリズムでは、この映画の興行を「成功」と評している

記事も確認できるので、失敗作と言い切ることも出来ないと思われる。[81] 映画批評家から博した好評や、一般ジャーナリズムでも話題としてとり上げられ、「二十六聖人」の名が一般にも広まったであろうことを考えると、カトリック教会の対外的な文化活動としては、一定の成果をもたらしたことは、評価できるからである。事実、カトリック教会では、この映画の公開に合わせて、「原著作」の『鮮血遺書』[82]をはじめとする関連書籍の出版キャンペーンが展開され、小規模ながら布教をめざしたメディア・ミックス的展開が図られていた。先にふれたように、レオン・パジェスの『日本廿六聖人殉教記』が、岩波書店から出版されたのも、この映画の上映を機にしたものであった。[83] また、公開翌年にも、教会関係者により、映画を通して「二十六聖人」に関心を抱いた人々を対象に、一般向けの著書が出版されている。[84]

この映画の上映の成果を報告する記事は、先述したように『日本カトリック新聞』に多数掲載されている。また、大阪教区のパリ外国宣教会の宣教師は、一九三一年と翌年の二回、パリ本部へ送られた年次報告書で、この映画の公開がもたらした反響を報告している。[85] しかし、カトリック教会の内部で、この映画の宣教面での成果に関して、懐疑的な意見が存在していなかったわけではない。

それは、映画公開から約二年後、東京大司教区の神父と男女数人の信者の間で、匿名形式でおこなわれたある誌上座談会での発言によって確認することができる。[86] この座談会の主題は、若い女性向けの推薦出版物に関したものであるが、議論は、カトリック出版物の一般的な問題点にまで及び、出席者の間で、それらが、世間の一般読者に関心を持たれるにはどうすればいいかという点を巡って、率直な意見が交換されている。その議論の間、カトリック出版物が読まれない理由の一つとして、カトリック色の濃いことが理由にあげられた後、話題が、わずかながら、この映画に触れられている個所がある。そこでは、ある女性信者が、「キリシタン物などになると、芥川さん位の腕でないと面白くは読めないのです」という意見を述べ、続いて、「神父様のお作りになったキリシタン映画はよい影響を及ぼしましたが……」と発言したのに対し、ある男性信者は、「未信者は反感を持ちました」と答えている。この女性の発言者は、芥川龍之介のキリシタン小説を評価する人物なので、『二十六聖人』映画の物語構成に関しては、物足りなさを覚えていたのではないかと想像されるが、宣教的観点からは、作品の公開が成果をもたらしたと考えて、肯定的評価を与えている。それに対して、この発言を受けて意見を述べた男性信者は、この映画が、一般観客に受け入れられなかったという考えを述べていることから、映画の宣伝効果に対して、否定的な意見の持ち主であることが明らかである。座談会の話題がこの映画に戻ることがなかったため、他の参加者の意見を知ることはできないが、この二人の作品に対する距離感を感じ

させる発言から判断しても、教会内のこの映画に対する受けとめ方が肯定一色ではなかったことはうかがえるように思われる。[87]

四、『二十六聖人』の海外上映

平山は、欧米諸国で『二十六聖人』を上映するため、一九三二年二月中旬、渡米の途についた。当初、一年の予定であった海外興行は、結果的に二年に及び、彼は、一九三四年の四月に帰国している。この滞在期間の大幅な延長は、彼の予想を裏切って、現地での上映契約が順調に進まなかったことによる。平山自身は、その理由として、世界大恐慌後の経済不況や、満州事変後の対日感情の悪化などを理由に数えているが、また、彼が欧米での興行的成功を事前に甘く見込みすぎていたことも起因していたようである。

平山の海外興行に関しては、『長崎カトリック教報』が、滞在先各地から、長崎教区の神父に送付された彼の書簡を掲載しているため、その時々の状況をある程度知ることができる。この長崎教区の機関誌は、海外滞在中の平山のもとにも届けられているので、彼の近況通信は、紙上で公開されることを前提に送られていたものと思われるが、その掲載理由には、郷土出身者の海外での活躍振りを伝えるというものにとどまらず、平山の国士的活動が、教会の一定の保護につながるという期待も教会関係者にあったためではないかと考えられる。これらの平山の書簡は、当事者の記述であるため、興行の報告に関して、主観性を免れていない面も見受けられるが、彼の滞在中の出来事や、その時々の感想を知る上で、不可欠のものである。[88] また、『二十六聖人』映画を紹介している欧米のカトリック雑誌の記事は、この映画が現地でどのように受けとめられていたかを伝える貴重な資料である。本章では、これらの資料を用いつつ、以下、彼の海外興行が、どのような経緯を辿り、また困難と遭遇することになったのかを具体的にみていこう。

日本映画の海外進出は、一九二〇年以降、映画業界の関係者によって試みられていたが、商業的に成功した作品はまだうまれていなかった。[89] 平山の海外行きに関して、『日本カトリック新聞』（「日本二十六聖殉教者映画―いよいよ欧米へ」『日本カトリック新聞』三三二号、一九三二年二月二十一日）は、「キネマ界に於いても本邦映画の欧米進出として、異常なセンセーションを起して居り、其の欧米に於ける評価如何と多大の興味をもって」眺められていると報じており、当時のカトリック関係者が、この映画の海外興行に大きな期待を寄せていたことがうかがえる。

日本カトリック教会で、前例をみないこの国際的規模の壮挙を可能にしたのは、平山の個人的な資力と、斎藤実に代表される日本の政官界への彼の人脈、そしてカトリック教会のもつ国際的なネットワークであった。再布教の開始期以降、この時期まで日本人カトリック信徒の手になる作品が、特別な機会を除いてほとんど海外で紹

介されていなかったことを考えると、この映画の上映は、日本の教会関係者の力で製作された作品が、日本人自身の手で、はじめて諸外国のカトリック教会に紹介されることになったという点で、画期的な意義をもっていたといえる。

すでに指摘した通り、平山は、映画製作の計画段階より、海外での作品上映を視野に入れていたが、日本国内での上映目的が、日本人のキリスト教に対する従来からの偏見を打ち消すことにあったのとは異なり、欧米での興行は、作品を通した日本人の国民性の宣伝によって、満州事変以降、悪化している対日感情を改善させることが目指されていた。陸軍省と外務省は、この映画に対日世論の改善に向けたプロパガンダ映画としての価値を認め、平山の渡航にあたって、関係者による歓送会が、開かれている。[90] 平山が、自身の映画上映の担うプロパガンダ的役割に自覚的であったことは、アメリカ滞在中の書簡で、「時局紛糾の際、日本二十六聖人が日本宣伝の役を務めたことは国家の為め大成功であった」と語っている点からも明らかである。[91] 彼が、各地の滞在先で、大使館や領事館の日本政府関係者に宣伝費用の補助など様々な形で援助を受けていたのも、自身の活動に公的性格を認めていたからこそなのだと思われる。

なお、平山は、欧米での映画興行を終えてから数年後、蒙古連合自治政府の嘱託として、満蒙地域のカトリック教徒と日本の教会との交流運動に従事しているが、その時の活動のなかで出版された著書で、自らの活動を指して、「カトリック工作」という言葉を使用している。このように、彼には、「東亜新建設の大業」のため、自らの奉じる宗教を「宣撫工作」の手段として用いることに疑問をもたなかったという一面があったが、それは、この『二十六聖人』の海外興行において、すでにあらわれていたといってよい。[92]

平山の滞米していた期間は、現地で反日感情が高まっていた時期であった。平山に少し遅れて、一九三二年五月に渡米し、対日世論の改善に努力していた人物に新渡戸稲造がいる。新渡戸は、戦前の日本人で、もっとも国際的に高い知名度をもつキリスト者であったが、日本の中国大陸における軍事活動を弁護した、この時の彼の啓蒙宣伝活動は、アメリカのジャーナリズムで強い批判を受けていた。[93] これに比べると、平山の活動は、映画興行を中心としたものであったため、それほど反発を受けることはなかったはずである。もっとも、対日世論の改善に使命を感じていた平山にとって、欧米社会に反日感情が存在すること自体は、自身の活動舞台が与えられたことを意味するので、むしろ、望むところであったかもしれない。

平山は、渡航前に滞在予定先のカトリック教会に連絡をとり、また日本の外国人宣教師に各地の関係者に向けた紹介状の作成を依頼して、海外興行の準備を整えていた。彼は、当初より、欧米の教会関係者の手を借りつつ、映画業界に作品を紹介し、映画会社と上映契約を結ぶ予定でいたと思われる。アメリカに到着後、平山は、ま

ず、ハリウッドに滞在し、六月中旬まで海外上映向けに英語字幕の作製などフィルムの編集作業に従事していた。この時、彼は、現地の業界関係者から、作品の宗教色が強すぎるため、アメリカの観客に受け入れられやすいように、恋愛のテーマを絡めて再編集することを勧められているが、彼は、物語とは無縁のメロドラマ色が強まることを嫌い、商業主義的配慮からなされたこの助言を断っている。[94] これは、撮影済みのフィルムの再編集で、実現することが難しいという事情もあったであろうが、平山にとって、経済的収益以上に、作品を可能な限りそのままの形で観客に鑑賞してもらうことが重要であったことを物語っている。

ただ、当時のアメリカは、不況下にあったため、映画産業関係者も、この映画に興味を持ちながらも、日本の殉教史話というなじみのない題材の作品の契約には二の足を踏んでいたようである。アメリカの映画会社と配給の契約を結ぶことの困難を理解した平山は、メリノール宣教会が、彼らの斡旋で、巡回型の上映会をアメリカ各地の教会や学校で開くことを提案したため、その考えに賛同することになった。平山と極東方面で活動するメリノール宣教会との関係は、彼らが宣教活動をしていた朝鮮で結ばれていたものであろう。在米日本人の子弟が通うメリノール宣教会が経営する学校でも、『二十六聖人』映画の上映会が行われ、[95] また、彼の伯父の守山甚三郎が、六月に長崎で亡くなったときには、この宣教会でミサが行われている。[96]

同会の創立者であるジェームズ・ウォルシュ神父が、この映画について高く評価する文章を会報に載せ、作品にふさわしい契約先が見つからないことを遺憾に思うと述べているので、この映画が、当初、宣教会の本部で、高い評価を得ていたことは間違いない。[97] しかし、平山とメリノール宣教会の関係は、後者が、この作品の全米での上映に関して協力をとりやめるという不幸な形で、終わりを遂げることになった。平山は、この経緯に関して、長崎の教会関係者に報告しているが、その書簡で、「当地ニューヨーク着以来は、一ヶ月半メリノール会が全米国の上映権を引き受くるというので、誰にも見せず、何人にも交渉も出来ず、引釣られて居りました処、最後に金が出来ないといふ口実の下に違約されて、一ヶ月半は棒に振りました。それもメリノール会の内部に支那伝道部の神父様等が反対したとのことで、墜に中止となった」と、やや感情的な口吻で同会の対応を非難している。[98] ここで、「口実」という言葉を用いられていることからみて、メリノール宣教会の「違約」が、採算の見込みがとれないという経済的理由によるものではなく、中国で活動経験のある宣教師らの反対が、その原因であると平山がみなしていたことは明らかである。

もともと、平山は、諸外国における対日感情の悪化が、日本に対する誤解や認識不足に由来しているとみなしており、『二十六聖

人』映画の興行を通じた日本の紹介によって、観客の日本に対する偏見を払拭して、国際親善に貢献することができると考えていた。彼は、実際、アメリカでの自作の上映効果に関して、「一度この映画を見れば、その偉大なる精神に酔わされて、心中密かに日本人に対して好感と敬意とを表するようになるその実例を幾度も目撃しました」[99]と書いている。日本の殉教史話に関する映画作品が、当時の日本の大陸政策に対する欧米人の批判的見解をどれだけ改めることを得たかどうかは別にして、国際的な交流が、相互を知ることによって始まることを考えれば、彼の活動は、日本に関して知識の不十分な人々に日本文化の紹介を目指した、草の根の文化交流運動としての性格の一面をもっていたといえる。[100] しかし、平山の海外興行には、日本軍部の協力をえた対日世論の改善工作としての一面があることは事実であり、中国人側に共感を抱くアメリカ人宣教師からは、彼の活動が、日本軍の中国大陸での活動に対して正当化を図るものとみなされ、その政治的性格が反発を招くことになってしまったのであろう。

平山にとって、満州事変などにおける日本軍の武力行使は、正義以外の何物でもなかったので、メリノール宣教会による協力拒否の対応は、裏切りにしか映らなかったことは、想像に難くない。前述したように、平山は、朝鮮における独立運動にプロテスタントの宣教師が多数関与していたことを強調する著作を映画公開前に出版していたが、アメリカ滞在中の通信文でも、アメリカ国内における排日運動が、プロテスタント系の大学や、教会の牧師らによって使嗾された結果、活発化しているという考えを述べていた。[101] 彼の認識図式では、カトリックは親日家で、プロテスタントは反日家であると善悪二元論的に把握されていたため、カトリック教会の内部から、『二十六聖人』映画の上映に対し、非協力的な対応がとられたことは、彼の世界観を揺るがしかねない衝撃を与えたことと思われるが、この後、彼が特にその認識を改めたような形跡はみられない。朝鮮における支配者層に属し、当地での事業の成功によって社会的名士となりえた平山は、自身の朝鮮民衆への慈善事業が評価されたこともあり、日本の植民地統治を朝鮮に文明化をもたらす善政とみなして疑わなかったと思われるが、[102] それだけに、彼は、他民族に支配される側の感情には無頓着だったと思われ、中国人側の立場から物事をかえりみることも不可能であったのであろう。[103]

メリノール宣教会との協力関係が失われたあと、平山は、仲介を経ずに、彼自身で教会関係者と交渉し、巡業形式で、全米各地での上映をすすめることになった。しかし、利益の取り分に関心をもつアメリカのカトリック神父らのビジネスライクな対応は、彼を戸惑わせたらしい。[104] 訪問先の教会の内、関心を持つ教会は、一割か二割で、上映が可能な場合でも、収入の分配に関して、駆け引きをしなくてはいけなかったのが実情であったらしく、「『日本二十六聖人』

と云えば、カトリック教会では必ず歓迎するものと思っていたのが、大間違いでした」と率直に彼はその失望を吐露している。[105]

しかし、アメリカ滞在末期に書かれた通信文によると、平山は、学校と教会を中心に二百ヶ所以上を回り、約十五万人の人々が作品を鑑賞しているので、その精力的な活動によって、カトリック信徒を中心に、相当の数の人々が、この日本映画に接する機会をえたことは、事実である。[106] また、平山は、映画の製作に関わった鹿児島教区長のロアの斡旋で、カナダでも上映会を催しているが、現地のフランシスコ会の協力もあって、短時日の滞在でも、その興行は実り多いものであった模様である。[107] ケベックの『ミッション・フランシスカン』誌は、映画の好意的な紹介をおこない、平山のラヴァル大学での講演や、ケベックの大司教らの映画を賞賛する書簡を掲載している。[108]

一九三三年四月下旬、大西洋を渡って、フランスに到着した平山は、すぐさまローマに直行し、ヨーロッパでの上映実現に向けて精力的な活動を開始している。[109] 恐らく、アメリカで思うように契約を進められなかったことに対する失地挽回の意気込みがあったのであろう。ヨーロッパに到着して間もない時期、平山は、ミュンヘンから、朝鮮総督の宇垣一成に次のような手紙（一九三三年五月十日）を送っている。[110]

「皇国の光輝愈々揚る。

国家多事の際閣下の御健康を祝し奉候。四月十六日ニューヨーク発ローマにて目下全世界の聖職者集合の好機会を利用して、大に日本宣伝に努むべく打合せの為めミュンヘン大学教授等と会見準備相進み申候。ローマを振出しに全欧州に愈活躍可致候。

現内閣のヒツトラ氏は極力国民の風儀思想の善導に力を注き（ママ）居り、青年訓錬は最も目覚ましく女の口紅禁止や断髪禁止の如きマルキシズムに対しては頗る厳重に取締り居候。

本日ミュンヘン大学にて朝鮮統治の現状につき講演致申候。」

この宇垣への近況の報告で、彼は、全世界に教会をもつカトリックの一信者という自身の属性が、日本の国際的宣伝に貢献することを可能にするという、カトリックの利点を訴えようとしているように思われる。また、彼が、映画上映だけではなく、「朝鮮統治の現状」のような一般的な演題で講演を行い、その活動を朝鮮総督に報告している事実は、彼の西洋社会における「日本宣伝」が、また、一面では、日本人カトリック信徒による愛国者的行動を日本に向けて立証する「宣伝」行為でもあったことをあらわしている。

平山は、ヨーロッパでは、北米のように巡回形式による興行をおこなうのではなく、あくまで映画会社と契約を結び、一般映画館へ配給される形で上映されることを希望していたようである。同年七

月の通信文で、彼は、イギリスを除くヨーロッパ諸国を廻っていることを報告し、公開が決定したときには、各国の日本大使館で、セレモニーを行う約束を取り付けたことを語っている。[111] 平山は、このように映画上映の契約先を探すかたわらで、ヨーロッパの各言語版の音声解説付きフィルムを、ブリュッセルで製作していた。[112]

ベルギーのイエズス会の宣教雑誌は、同年の七月号で、『二十六聖人』映画の製作経緯や内容を紹介する記事を掲載し、ベルギーのカトリック信徒の間で、上映時に鑑賞されることを望んでいる。[113] フランスの『ミッション・カトリック』誌も、カナダの『ミッション・フランシスカン』誌の映画記事によって作品を紹介し、フランスでも公開されることを期待していた。[114] このように、彼の映画作品は、当時のヨーロッパのカトリック教会でも、全く関心を示されていないわけでもなかったが、アメリカ同様に、ここでも、彼の期待に反して、契約先の相手探しには難航することになった。ただ、平山は、ヨーロッパでは、最後まで巡回方式の作品上映を特に試みなかったようである。当地では、彼が幼少期から郷里の長崎で身近に接していたフランス人神父や修道士の所属するパリ外国宣教会やマリア会に、援助を頼むことも出来たと思われるが、彼は、滞欧中、これらの会に上映協力を積極的に求めていた様子がみられない。また、ヨーロッパのカトリック教会関係者が運営する映画サークルなどに対しても、平山は、「教会側にも種々なる会があって、映画を改善、指導の目的で活動はしているが、まだまだ幼稚なものです。だから大金を投じて映画を製作も買収も援助も出来ない！私の映画を国内だけでなら援助するが、外国まで進出する実力がないのです」と述べ、まともに相手にするに値しないという態度に出ている。[115]

平山は、ヨーロッパに滞在中、ベルギーを長期の居住先にしていたが、それは、彼が渡米前に京城駐在のベルギー名誉領事に就任していたためと考えられる。ベルギー政府は、平山に、朝鮮とベルギーの経済的協力関係の発展への有力な協力者となることを望んでおり、平山自身も出発前、同国駐日大使バッソンピエールに、ベルギーの経済事情を研究する予定を語っていた。[116] しかし、映画の契約成立がはるかに優先課題であった彼は、長きに亘った滞欧時において、申し訳程度にしか経済研究を行っていないようである。[117] 当時、日本とベルギーの両国間の関係は、比較的良好であったとはいえ、映画を通した日本イメージの向上という平山の目論見は、国際政治の激動期であった当時、ベルギーの政府関係者には、あまりにナイーブなものとして、真面目に受けとられるべくもなかったであろう。[118] いたずらに自作の映画上映の件で滞在が長引くことは、彼のような地位にある人物にとって、ベルギー政府に対して申し訳が立たず、心苦しいものがあったと想像される。

平山の滞欧末期の状況や帰国前夜の心境に関しては、「平山政十郎氏（ママ）を送って」（『長崎カトリック教報』一三三号、一九三四年五月一

日）というバチカンに留学中の日本人神学生の手になる記事がよく伝えているが、帰国直前に行われたプロパガンダ大学での映画上映の際、平山が、「或時の如きは精神の錯乱を来すのではあるまいかと気が気でないことさえありました」と語っている通り、滞欧末期の彼は、「或時は逆境に嘆じ、或時ははや絶望の奈落に沈淪せんとし、異国の一漂流者、語るべき相手とてもなく、つぶさに千難万苦をなめ」ていたと評されるほど、追いつめられていたものであったらしい。このような最悪の精神状態にまで陥っていたことは、彼が西洋での映画上映に賭けていたものが相当大きかったことを示している。

このような平山の精神状態の悪化には、当時の日本のカトリック教会をとりまく状況も、影響していたのかもしれない。彼の海外興行中、日本のカトリック教会は、暁星中学や上智大学の配属将校引揚事件や、大島高等女学校への迫害運動などで、緊迫化した状況におかれることになった。海外に滞在していた平山のもとにも、事件のあらましは、伝わっていたことであろう。平山が『二十六聖人』映画を製作した目的の一つは、この作品の上映を通して、日本人のカトリックに対する偏見をとり除くことにあっただけに、これら一連の出来事は、彼にとって、日本国内における興行の成果を否定する事態と受けとめられずにはおかなかったはずである。海外興行の成果が捗らず、ヨーロッパでの生活が長引く中、彼は、日本のカトリック教徒が、依然、非国民扱いされていることを考え、時に無力感に襲われることがあったとしてもおかしくはない。

契約交渉が当初の期待通りに運ばなかったため、滞在期間の延長を余儀なくされて、経済的に苦しい状況に陥ったことも、平山の心理状態に影響したことであろう。滞在末期に、外務省や首相の斎藤実から資金援助を受けていたことから推して、彼は、この時期、経済的に窮乏に近い状況に陥っていたと考えられる。平山にとって、経済的収益は二の次であったとはいえ、映画化の計画当初、興行の余剰収益を長崎教区の教会事業に充てるつもりでいただけに、このような状態には、内心忸怩たるものがあったに違いない。

それでは、なぜ、平山は、海外における映画公開の実現に向けて、ここまで熱心に行う必要があったのであろうか。それは、われわれが確認してきた通り、彼の海外興行の主なる目的が、日本人カトリック信徒が愛国者であるということを自らの身をもって証明し、日本社会にその事実を認知させることにあったがためであり、この承認の欲求こそが、極限状態にまで、彼を愛国者的な振る舞いに駆り立てていたことは間違いないように思われる。『二十六聖人』映画が海外で上映される際、鑑賞者に対して、「日本人」を代表するのは、作品中のカトリック信徒である。つまり、カトリック信徒の表象によって、優れた日本人のイメージを外国人の観客に与え、対日イメージの向上を図ることが、目指されたわけであるが、この宣伝

が成果を上げる事は、カトリック信徒が、日本の国難を救うことを意味する。平山が、ここまで、欧米諸国における映画上映の成功に固執したのは、それによって可能になるであろうと彼に期待されたカトリックに対する日本社会の認知が、彼の悲願であったからである。

帰国後、平山は、海外興行に関する凱旋講演会を行っており、一九三四年五月五日、「『日本廿六聖人』映画を携えて欧米を巡る」という演題で、大阪の玉造教会の四百人の聴衆を前に、成果を報告している。この講演の報告が、「アメリカ、カナダ並びに欧州行脚に於いて、各地の講演会に於いて、大和魂たる日本国民精神の紹介に大いに力を尽くし、日本の連盟脱退後の世界各国の微妙なる感情の動きに大いに貢献する処ありたり」と強調するものであったことは、彼の行動が計画当初から一貫したものであり、また、終始それが宣伝的性格の濃いものであったことを物語っている。[119] ただ、同年九月に、彼は、病気を理由にベルギー政府へ京城駐在の名誉領事職の辞任を申し出ているが、[120] 恐らく、長期にわたる滞欧生活で、心身ともに疲弊していたことが原因であったのであろう。

なお、帰国直前におこなわれたプロパガンダ大学の講演において、平山は、以前に契約を締結寸前に反故にされたこともあったカトリック系映画会社エイドフォン（Deutsche Eidophon-Film GmbH）と最終的に契約が成立したことを語っている。ただ、作品の公開上映を熱望していた平山が、契約が成立したにもかかわらず、一般公開を待たずに帰国したとは考えにくいので、その契約の調印が事実であれ、それは、上映権の譲渡に近いものではなかったかと推測される。[121]

平山が帰国して約二年半後の一九三六年末、『日本カトリック新聞』（五八六号、一九三七年一月十日）の記事は、満州国で活動するスイスのある修道会（ベトレヘム宣教会であると思われる）の修道士が、スイスの各地でこの作品の上映を試み、大勢の観客を集めていたことを報じているが、この事実は、平山の作品が、彼が帰国した後にも、教会関係者の自主上映という形で、ヨーロッパの観客に鑑賞されていたこと、そして、この作品が、当時の観客に訴える力をもっていたことを伝えている。[122] このことは、もし、平山が、この映画のヨーロッパでの上映にあたって、最初から、映画会社との契約にこだわらず、現地の教会関係者の協力と助言をえながら、巡回型の自主上映を行っていれば、草の根の評価の高まりを受けて、映画会社との間で、契約が成立する可能性も残されていたことを示しているように思われる。もっとも、この映画が、当時、欧米の観客に感動を与えることができたとすれば、それは、平山が宣伝を願っていた「日本国民性」という一国的なものよりも、むしろ、この作品に描かれた殉教劇としての普遍性ではなかったであろうか。[123]

恐らく、平山の海外興行が、彼の期待に反して、実りの薄かった

ことは、当時の滞在先の社会状況が彼に幸いしなかったことを別にして、西洋諸国での日本の宣伝活動の功績をあげるために、一般公開にこだわりすぎたことが大きかったと考えられる。また、彼の活動には、日本に向けたスタンドプレーの一面が濃く、その結果、彼が、「日本」の代表者としての自己を意識するあまり、西洋人に対して、気負いがちな対応をとりがちであったことは、彼が、滞在先の文化や人との出会いから、積極的に異文化を学ぼうとした様子がみられないこととも関連していよう。この事実は、平山の海外興行が、自らが理想とする「日本像」のみを他者に与えようとする文化「宣伝」であっても、他者に対して、開かれた謙虚な姿勢をもつ文化「交流」ではなかったことを示しているように思われる。

おわりに

長崎地方のキリシタンの子孫であるカトリック信徒が、その強固な信念と行動力で、実現させたこの『二十六聖人』映画の興行は、日本近代のカトリック史でも、過去に例をみないスケールの大きな文化事業であった。カトリック教会の関わった初の本格的な劇映画の製作であったこと、作品が、宣教映画としての性格をもち、全国規模による信者参加の「カトリック・アクション」の機会をもたらしたこと、日本人信徒の手によって海外で作品が興行されたことなど、この映画は、当時の日本カトリック教会にとって、様々な点で新しい経験をもたらした。

この作品の国内興行は、しばしば非難や迫害の対象になってきた日本のカトリック教徒にとって、明るい希望をもたらした出来事であったが、また、この作品は、海外で興行された時、日本の官憲の支援を受けた国策的なプロパガンダとして用いられることになった。平山を海外における興行に促したものは、カトリック信徒こそが、模範的な日本国民であるということを日本社会に認めさせたいという彼の願望であった。平山は、決して好戦主義者ではなかったが、カトリック信徒は非国民であるという批判をしりぞけるため、彼の示した過剰なまでの愛国者的行動は、日本軍部の対外政策に対して、無批判に追従する結果に陥ってしまったことも事実である。平山の活動が、カトリック教会の置かれた困難な現状を打開する目的で行われたものであるだけに、その道行は、昭和初期の教会が直面した苦境が、いかに対応の困難なものであったかを象徴するものになったということができる。

注

（1）この映画は、欧米興行の際、平山自身の手で、音声処理をされて再編集されたこともあり、様々な版のフィルムがある。東京国立近代美術館フィルムセンターは、この作品の九十六分版（サイレント）の二本のフィルムと、八十八分版（トーキー）のフィルムを所

蔵している。それぞれ個人コレクターからの寄贈によるものである。筆者は、フィルムセンター所蔵のフィルムを見る機会を得ていないが、同センター映画室のご教示によると、トーキー版の言語は、英語である。近年、カトリック教会では、長崎の聖母の騎士修道院の小崎登明氏の活発な上映活動により、この映画は、多くの教会関係者に鑑賞されている。小崎氏が上映活動で使用したフィルム（八十五分）には、英語字幕のあることから、アメリカ上映用に編集された版が里戻りして、再編集されたものと思われる。また、海外では、ベルギー（ブリュッセル）の王立シネマテークが、フランス語トーキー版を、ルーヴァン・カトリック大学（K.U.Leuven）の研究資料センター（KADOC）が、オランダ語トーキー版をそれぞれ所蔵している。所蔵フィルムに関して、貴重な情報をいただいた東京国立近代美術館フィルムセンター、また、各フィルムの鑑賞にあたって、便宜を図っていただいた小崎登明氏、京都キリスト教文化資料館、ベルギー王立シネマテーク、ルーヴァン・カトリック大学の研究資料センター、同大学のフィリップ・ヴァンハールメルス氏の皆さまに厚くお礼申し上げる。

（2）管見では、この映画に触れた日本キリスト教史の著作は、下記の日本カトリック史の概説のみである。同書は、この映画の公開の反響を伝えるパリ外国宣教会の年次報告を紹介している。Hecken, Joseph Leonard van., *Un siècle de vie catholique au Japon, 1859-1959*, Tokyo : The Committee of the Apostolate,1960, p.148. この年次報告に関しては、注（85）を参照。

（3）小崎登明「殉教映画の日本二十六聖人たち」『十七歳の夏』聖母の騎士社（聖母文庫）、一九九六年、二二〇―二四八頁。小崎氏は、平山政十を直接知る古老の信者に、その人となりに関して聞き取りを行っている。永富映次郎『鮮血の十字架　日本二十六聖人殉教記』中央出版社、一九七七年、一五三頁。カトリック教徒の著者は、若き映画人時代、一信者の熱意によって、『二十六聖人』の映画が製作されることを知って感激したことを語っている。

（4）小松弘「映画『日本二十六聖人』」『岩波キリスト教辞典』岩波書店、二〇〇二年、八五三頁。なお、『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、一九八八年、七九二頁）では、映画『二十六聖人』は、「鮮血遺書」（海老沢有道）の項目で、この著作を原作にした映画作品として言及されている。

（5）「日本二十六聖人の映画に就て」『声』六六三号、一九三一年四月。「二十六聖殉教者の映画に就て」『長崎カトリック教報』五九号、一九三一年四月一日。この文章は、一九三一年二月二十五日に書かれたものである。原文では、「二百年来の伝統的誤解」となっているが、明らかな書き誤りなので、引用文では訂正した。以下のカトリック関連文献の調査では、上智大学キリシタン文庫、聖トマス大学図書館、京都ノートルダム女子大学図書館の皆さまの御世話になった。心より感謝申し上げたい。

（6）和田洋一「日本・カトリック　三〇年代前半の苦悩」『キリスト教社会問題研究』二五号、一九七六年。田代菊雄「天皇制国家主義とカトリック教育（一）―上智大学・暁星中学配属将校引揚事件を中心として―」『キリスト教文化研究所年報』（ノートルダム清心女子大学）一三号、一九九一年。須崎慎一「日本ファシズムとカト

リック教排撃問題」『日本ファシズムとその時代―天皇制・軍部・戦争・民衆』大月書店、一九九八年など。

(7) カトリック中央協議会福音宣教研究室編『歴史から何を学ぶか―カトリック教会の戦争協力・神社参拝』新世社、一九九九年。

(8) Béguin, Marcel., *Le cinéma et l'église: 100 ans d'histoire(s) en France*, Versailles: Les Fiches du cinéma, 1995, pp.12-13.

(9) 月城「『クオ、ヴァヂス』を見る」『声』四五七号、一九一三年十二月。呦々生「活動写真『全勝』を観る」同上、四六五号、一九一四年八月。鰐川「活動写真『キリスト』」同上、四九五号、一九一七年二月。もちろん、欧米のキリスト教関連映画に、興味を抱いていたキリスト教徒は、カトリック信者に限られていたわけではない。内村鑑三は、晩年、『クォ・ヴァディス』(ガブリエリノ・ダヌンツィオ)や『キング・オブ・キングス』(セシル・B・デミル)などの作品を鑑賞し、感銘を受けていた。『内村鑑三全集』三五巻、岩波書店、一九八三年、五一、四三二頁。

(10) 雨宮俊城「聖劇と映画」『声』五九九号、一九二五年十二月、四七―四八頁。以下、引用資料に関しては、適宜、句読点を加え、旧かなづかいを新かなづかいに、接続詞や副詞などの漢字をひらがなに、カタカナをひらがなに変更したことをお断りする。

(11) 東京の聖心聖マルグリット会は、一九二九年四月、映画『キング・オブ・キングス』の鑑賞会を催している。そのことを伝える記事は、この映画を「ナザレのイエズス・キリストの公生活を如実に描き出したる芸術と信仰の結晶、涙と感激の記録」と紹介していた。『子羊』七巻、六号、一九二九年、四〇頁。

(12) 「活動写真に就て」『交教家庭の友』三一号、一九二二年七月。「映画と児童」『声』六二七号、一九二八年四月。「活動写真の利害」『光明』六三三号、一九二八年七月二十二日。「活動写真に就いて」『交教家庭の友』一二四号、一九三〇年四月。

(13) 「活動写真を教育に用ゆ可し」『声』四四七号、一九一三年二月。秋庭紫苑「圧倒的フィルムの威力」同上、六三〇号、一九二八年七月。「映画界の善導を期せよ」同上、六三三号、一九二八年十月。「映画伝道会を起せ」同上、六三六号、一九二九年一月。なお、フランスのカトリック教会では、二十世紀初頭より、映画という新メディアに対して、肯定と否定の対応が併存していた。Béguin, Marcel., *op.cit.*, pp.11-13.

(14) 「大映画『日本の殉教者』いよいよ今夏完成」『光明』七一六号、一九三〇年二月二十三日。

(15) 以上の伝記的情報は、国立公文書館の所蔵資料「京城駐在白耳義国名誉領事平山政十へ御認可状御下付ノ件」(公文雑纂・昭和六年・第二十巻・外務省三・外務省三〔御委任状・御認可状〕)所収の平山の履歴による。

(16) 徐鐘珍「斎藤実総督の対朝鮮植民地政策―「文化政治」期の宗教政策を中心として」『早稲田政治公法研究』六四号、二〇〇〇年、二一五―二一八頁。斎藤は、首相在任中の一九三二年六月、朝鮮総督時代の約十年間の統治で、カトリック教会に好意的な立場を評価され、教皇ピウス十一世から、大十字章大一級勲章を受けている。

(17) この『万歳騒動とカトリック教』は、カトリック雑誌『光明』(七四七号、一九三〇年九月二十八日)のコラムで、「既に有名にな

った、カトリック社会事業家たる著者が、国士的の気魄と熱烈なカトリック信念とに動かされて綴ったものが本書である」と紹介されている。なお、この著作で、平山の披歴した見解は、彼個人にとどまらず、当時の日本カトリック教会の中でも一般に受け入れられていたと思われる。田口芳五郎司祭（当時）は、その著『満洲帝国とカトリック教』（カトリック中央出版部、一九三五年）で、「曾て朝鮮に於いて『万歳騒動』なる不逞の企が行われ、数多の朝鮮人を渦中に捲込み、物情騒然たる事があったが、此の多数の者の中に、唯一人のカトリック教徒も加入し居らず」と記している。カトリック中央協議会福音宣教研究室編、前掲書、三九頁。

(18) 平山は、斎藤実宛の書簡（四月二十日）で「拙者の計画日本切支丹殉教史の映画化に就て高官らに説明し御賛同の栄を給らんことを希望」する旨を書いている。年号の記載はないが、恐らく一九三〇年の書簡と思われる。国立国会図書館専門資料部編『斎藤実関係文書目録　書翰の部二』国立国会図書館、一九九九年、四七頁。

(19) 「卓上展望」『光明』七四五号、一九三〇年九月十四日。

(20) 「殉教血史「日本廿六聖人映画」満都の血を湧す」『日本カトリック新聞』三一二号、一九三一年十月四日。『長崎カトリック教報』の記事は、斎藤実が、この映画の撮影現場の見学を希望していたことを報じている。「廿六聖映画」『長崎カトリック教報』六二号、一九三一年五月十五日

(21) ベルギー外務省文書館、アルベール・ド・バッソンピエール駐日大使発本国外務大臣宛報告書簡（一九三一年九月十七日、東京）。*Dossier Personnel, N° 94, Consulat de Belgique à Seoul, N° 1565-262.*

(22) 「平山政十郎氏を送って」『長崎カトリック教報』一三三号、一九三四年五月一日。

(23) 平山政十「日本廿六聖人映画化企図の動機」『シネマ王国』一九三一年九月号、五〇―五一頁。この文章を収める、『シネマ王国』の「日本廿六聖人」特集号（小崎登明氏に提供いただいた）は、製作関係者の声を伝える貴重な同時代資料である。また、平山は、ケベックでの映画上映の時に行われた講演でも、伯父の迫害経験談に対する感動が、映画化の動機であることを語っている。"Allocution de M. Dominic M. Hirayama à la Salle des Promotions, Université Laval, Québec, 6 Janvier 1933," *Missions Franciscaines, N° 2, 1933, p.75.*

(24) 『二十六聖人』映画の製作予定を伝える、カトリック出版社（武宮印刷出版部）の広告記事。四国教区のカトリック雑誌『子羊』（一九三〇年八月号）の表紙裏に掲載されている。

(25) 『マリア会日本渡来八〇年』マリア会出版部、一九六八年、二六一―二六三頁。高木一雄『大正・昭和カトリック教会史』一巻、聖母の騎士社、一九八五年、二五二―二五五頁。

(26) 早坂司教「新年に際して」『長崎カトリック教報』二九号、一九三〇年一月一日。「新年を迎えて」同上、五三号、一九三一年一月一日。同紙には、他にも、神社参拝を強制する社会的風潮を批判する記事が、折に触れて掲載されている。

(27) 前掲（5）、（24）の記事による。

(28) 外務省外交資料館「本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件 第三巻、

三、加特力教」大阪府知事報告「カトリック映画講演会開催に関する件」。

(29) 松村菅和、女子カルメル修道会共訳『パリ外国宣教会年次報告』二巻、一九九七年、二五三―二五四頁。Angles, Jean., "L'évangélisation au Japon: Conférences publiques; Essai de théâtre chrétien," *Missions Catholiques*, N° 2116, 1909, pp.618-620.『二十六聖人』映画公開時、映画界に入って間もなかったあるカトリック信者は、自分の映画界入りの動機が、「日本二十六聖人」映画の製作だったため、その公開を聞き、当初ショックを受けたことを語っている。永富映次郎、前掲書、一五三頁。

(30) 平山政十「日本廿六聖人映画化企図の動機」前掲、五一頁。

(31) 「大映画『日本の殉教者』いよいよ今夏完成」『光明』七一六号、一九三〇年二月二十三日。

(32) 「卓上展望」『光明』七四五号、一九三〇年九月十四日。二十六人の殉教者の中には、バプチスタ神父をはじめ、六名の外国人（スペイン人が四名、ポルトガル人とメキシコ人がそれぞれ一名）も含まれていたが、平山は、あえて彼らの殉教に日本的性格を認めようとしたといえる。なお、「武士道」「大和魂」といった言葉は、当時の日本人と同じく、彼にとっても、高潔な日本国民精神を表すものであったことは明らかである。十九世紀末から流布した「武士道観念」は、キリスト教倫理の影響を受けて生みだされたものなので、彼のようなカトリック信徒にも受け入れられやすかったのであろう。

(33) 山室信一『日露戦争の世紀』岩波書店（岩波新書）、二〇〇五年、一九一頁。

(34) 太田雄三氏は、満州事変後、武士道が、軍国主義的宣伝の格好の道具となっていたこと、そして、一九三三年一月の『タイム』誌で、武士道が「日本帝国の征服者的合言葉」と形容されていたことを指摘している。太田雄三「日本文化紹介者としての新渡戸稲造」『〈太平洋の橋〉としての新渡戸稲造』みすず書房、一九八六年、五九頁。

(35) 平山政十「殉教血史『日本廿六聖人』」『シネマ王国』前掲、四九頁。

(36) 「二十六聖殉教者の映画」『長崎カトリック教報』四〇号、一九三〇年六月十五日。「大映画『日本の殉教者』いよいよ今夏完成」『光明』七一六号、一九三〇年二月二十三日。前者の記事では、松崎実が執筆した脚本に、佐藤紅緑が潤色すると伝えられ、後者では、佐藤が、松崎の提供した資料を利用して、脚本を製作すると報じられている。もっとも、脚本が、松崎と佐藤の共同製作になることが予告されていることにおいて、両者の記述に変わりはない。

(37) 青山玄「大震災から現在へ」『つきじ』築地カトリック教会、一九七八年、一〇五―一〇七頁。この巡礼会（日本カトリック聖人昌慶会の前身）の設立は、『二十六聖人』映画の製作と並んで、日本の殉教者の崇敬が高まることの証と、同時代のカトリック者に受けとめられていた。「卓上展望」『光明』七四五号、一九三〇年九月十四日。

(38) 岡崎喜蔵「カトリックと映画（三）」『カトリック』八巻、四号、一九二八年四月、二九頁。

(39) "Allocution de M. Dominic M. Hirayama à la Salle des

Promotions, Université Laval, Québec, 6 Janvier 1933," *Missions Franciscaines*, N° 2, Mars-Avril 1933, p.76.

(40) 佐藤紅緑「キリスト劇の批評」『キリスト：戯曲』新潮社、一九二八年、一頁。佐藤は、自作の中で、この劇ほど「各新聞劇評家諸氏及び其他の学者達から真剣な批評を受けた経験を有たない」と書いている。

(41) 新国劇編『新国劇五十年』中林出版、一九六七年、一〇〇頁。

(42) 岩下壮一『カトリックの信仰』講談社（講談社学術文庫）、一九九四年、三三七頁。岩下の用いた諧謔的言辞から判断して、この芸術愛好家らしい宣教師は、岩下の友人であったソーブール・カンドウ神父のことであろうか。岩下自身は、佐藤紅緑の脚本の評価は別として、その真摯な作品への取り組みには、好意を抱いたようである。また、岩下は、あるカトリック信者が、キリストを演劇に取り上げた佐藤に難詰する手紙を送っていたことにも触れている。

(43) 藤井伯民「聖劇について―沢田氏の基督劇を観る」『声』六二五号、一九二八年二月、四七―五一頁。「キリスト劇の再演」同上、六三七号、一九二九年二月、三二―三三頁。藤井は、戯曲『細川がらしゃ』（公教青年会、一九二二年）などの作品を発表したカトリック信徒の文学者であったので、キリスト劇の上演には、無関心ではいられなかったのであろう。

(44) 当時、佐藤紅緑のキリスト劇の上演に触れたカトリック誌の記事には、他に「座談欄」（『光明』六〇四号、一九二八年一月、四―五頁）、「新時代の創造」（『カトリック』八巻、一号、一九二八年一月、一頁）などがある。

(45) ホイヴェルスは、後に野外演劇用の「二十六聖人」の脚本を執筆しているが、この作品では、殉教の場面だけが扱われている。ヘルマン・ホイヴェルス「野外劇　日本廿六聖人」片岡千鶴子、片岡瑠美子編『長崎と日本二十六聖殉教者』（長崎純心大学博物館研究、六輯）長崎純心大学博物館、一九九八年。

(46) 同上「受難劇について」「聖劇　受難（一）」『カトリック』十巻、三号、一九三〇年三月。

(47) 高市慶雄「日本公教史の最初にして最要の文献『ルイス・フロイース日本記』を読みて」『カトリック』八巻、二号、一九二八年二月、一四頁。

(48) 松崎実は、レオン・パジェスの著書を原典にしていた『鮮血遺書』の記述が、「必ずしも原著の記述を其の儘伝えていず、或は想像的文字を加え、或は記事の加除増減を擅にし、誤解誤訳も相当多い」ことを問題視していた。松崎実「はしがき」『日本廿六聖人殉教記』（木村太郎訳、松崎実校註）岩波書店、一九三一年、七―九頁。旧版『鮮血遺書』の問題点に関して、新村出「『切支丹鮮血遺書』改版序文」（『新村出全集』八巻、筑摩書房、一九七二年、三三三頁）も指摘を行っている。

(49) ヘルマン・ホイヴェルス『日本で四十年』春秋社、一九六四年、二二―二三頁。

(50) 池田敏雄『ビリオン神父：現代日本カトリックの柱石 慶応・明治・大正・昭和史を背景に』中央出版社、一九六五年、五五七―五六一頁。

(51) ただ、映画で、細川ガラシヤ夫人を登場させたことは、ホイヴ

ェルスの創案である。「新版序」ヘルマン・ホイヴェルス『細川ガラシア夫人』春秋社、一九六六年、二頁。

(52) 撮影台本に関しては、聖トマス大学図書館所蔵（田口芳五郎神父旧所蔵）のものを確認した。

(53) ヘルマン・ホイヴェルス『日本で四十年』、三七頁。

(54) 映画の社会的影響力を認めていた教皇ピウス十一世は、一九三六年の回勅で、非道徳的な映画を批判すると同時に、キリスト教精神にたつ優れた映画の製作を奨励している。田口芳五郎訳『映画を繞りて：ピウス十一世回敕』カトリック中央出版部、一九三六年。

(55) 志村辰弥「東西南北　羅馬だより　第二信」『声』六五七号、一九三〇年十月、五三―五六頁。同誌の次号（同上、六五八号、一九三〇年十一月）には、日本人留学生らに囲まれた平山の写真が掲載されている。

(56) 現在、保存されているフィルムで確認しても、この列聖式の場面が既成の撮影フィルムを合成して製作されたものとする、志村の報告に誤りがあるようには思われない。公開当時の批評で、この場面を評価する記事が少ないことも、この場面の観客に感銘を与えることが稀であったことを示しているように思われる。なお、平山が、ヨーロッパ公開用に編集したフィルムで、この列聖式の場面を削除していたことに関しては、注（112）を参照。

(57) 「二十六聖殉教者の映画に就て」『長崎カトリック教報』五九号、一九三一年四月一日。「日本二十六聖人の映画に就て」『声』六六三号、一九三一年四月。

(58) 「伊太利海港の修道院に日本殉教者の壁画」『光明』七五四号、一九三〇年十一月十六日。

(59) ハワイで、この映画が上映された時、現地の日本語新聞は、この映画の記事を掲載しているが、そこに収められた平山の談話に、彼自身の口から、「ローマ市民二十万人のロケ参加」が語られているのが確認できる。「平山政十氏の通信」『長崎カトリック教報』八三号、一九三二年四月一日。

(60) 映画製作中であった一九三一年四月、平山は、京都の宮津小学校で、「ムッソリーニと日本魂を語る」という講演を行っている。「廿六聖映画の平山氏、宮津で大獅子吼！」『公教家庭の友』一三七号、一九三一年五月、三〇頁。

(61) 「映画評　日活作品『日本廿六聖人』」『東京朝日新聞』一九三一年十月三日。

(62) 池田富保監督の生涯及び作品を扱った著書に下記のものがある。御園京平編著『オールスター映画の巨匠』私家版、一九九一年。

(63) 前出『シネマ王国』「日本廿六聖人特集号」（一九三一年九月号）の製作関係者の所感記事を参照。

(64) 作品中の教会の献堂式の場面には、広島教区のヨハネス・ロス司教が出演し、池田監督から「グレコの描くカルディナルのような顔は、まことに申し分がない」と評されていたという。ヘルマン・ホイヴェルス、前掲書、三七頁。なお、シルヴァン・ブスケ神父（パリ外国宣教会、西宮夙川教会主任司祭）も、この場面に出演していると『日本カトリック新聞』の映画評は伝えている。銀幕生「殉教血史　日本廿六聖人　映画評」『日本カトリック新聞』三一二号、一九三一年十月四日。

(65) 『長崎カトリック教報』六二号、一九三一年五月十五日。

(66) 『二十六聖人』映画が公開された時期の邦画界の状況については、宜野座菜央見「〝小春日和の平和〟における非常時」（岩本憲児編『日本映画とナショナリズム 一九三一―一九四五』森話社、二〇〇四年）の第二章「一九三〇年代前期と日本映画」が、詳しい。

(67) 『日本カトリック新聞』（三一三号、一九三一年十月十一日、三一四号、同年十月十八日）は、主だった新聞各紙の映画評（東京朝日、東京日日、中外新報、報知、読売、横浜貿易）を抜粋して掲載している。

(68) 矢田挿雲「廿六聖人の筋」映画リーフレット『日本廿六聖人』、五頁（「千日前太陽館」発行と記載のある上智大学キリシタン文庫所蔵のものを参照）。

(69) 『読売新聞』『報知新聞』掲載の映画評。前掲（67）による。

(70) 平山が、無論、この伴天連追放令に関する史実を知らなかったわけではない。前記の『シネマ王国』の映画特集号に掲載された彼による時代背景の解説では、豊臣秀吉が、一五八七年に宣教師の追放令を下していたことに言及している。ただ、この文章においても、宣教師に「頗る好意をもって」いたとされる秀吉が、宣教師に対して、追放令を下していた事情に関しては、「この命令はきびしく実行されな」かったという事実があれ、説明されないままになっている。平山政十「殉教血史『日本廿六聖人』」『シネマ王国』四六―四七頁。新村出は、この映画の鑑賞記で、映画と史実の異なる点を多数指摘しているが、秀吉の描き方に関しても、「秀吉の宣教師を路上で歓迎する所があるが、あれは全然史実に反し、秀吉の感情に正反対だと思う」と指摘している。新村出「日本二十六聖者」『新村出全集』第七巻、一九七三年、筑摩書房、二一五頁。

(71) 「殉教血史 日本廿六聖人映画 満都の血を湧す」『日本カトリック新聞』三一二号、一九三一年十月四日。

(72) 「廿六聖殉教者の映画完成す」『長崎カトリック教報』七一号、一九三一年十月一日。

(73) 「論説 日本廿六聖人の映画化」『日本カトリック新聞』三一三号、一九三一年十月十一日。

(74) 銀幕生「殉教血史 日本廿六聖人 映画評」『日本カトリック新聞』三一二号、一九三一年十月四日。

(75) 「日本二十六聖人 日活超特作」同上、三一三号、一九三一年十月十一日。

(76) 「映画『日本廿六聖人』さまざま」『子羊』一九三一年十二月号、三二―三三頁。このエッセイは、四国地方の教会で、この映画の歓迎されていた様子をユーモラスに伝えている。

(77) 柳茂安（クレマン・ルモワーヌ、パリ外国宣教会）「公教運動の精神と組織」『声』六六五号、一九三一年六月。

(78) 「長崎に於ける日本廿六聖人上映」『日本カトリック新聞』三二三号、一九三一年十二月二十日。

(79) 「談話室」『子羊』一九三一年十二月号、四五頁。

(80) 御園京平、前掲書、九三頁。

(81) 『朝日新聞』一九三一年十月二十四日、朝刊。このコラムの作者は、『二十六聖人』映画の成功により、日本映画界に、「宗教もの」の流行の兆しが見えると述べている。

(82) 『長崎カトリック教報』五九号、一九三一年四月一日。『光明』七七五号、一九三一年四月十二日。夙川教会で、「平山政十氏の二十六聖映画完成の好機を捉えて之を日本の津々浦々は勿論、支那朝鮮まで売り広める」ため、「鮮血遺書の廉価販売予約募集」がなされている。

(83) 岩波書店のこの本の広告文には、「今秋特作大映画に依て全国に紹介された日本廿六殉教者の正史正伝である」との一文がある。『日本カトリック新聞』三二四号、一九三一年十二月二十七日。

(84) 鈴木習之編『日本二十六聖人』星光社、一九三二年。パリ外国宣教会のA・メイラン神父が、跋文を寄せている。広告文（『子羊』一九三二年二月号）では、以下のように紹介されている。「大衆的パンフレットとして広く世に頒つために、鈴木習之氏によって筋面白く編まれたもので、我等の殉教者の精神を一般人に理解さする助となり、随て伝道的効果を齎すであろう良書である。」

(85) 松村菅和、女子カルメル修道会共訳『パリ外国宣教会年次報告』五巻、聖母の騎士社、二〇〇〇年、一二七―一二八、一四五頁。

(86) あけの星主催「女学上級生の読物についての座談会」『声』六九四号、一九三三年十一月、五五（八二三）頁。

(87) 管見では、当時の代表的なカトリック知識人が、この映画に積極的にコメントをした例が見当たらないが、それは、彼らのこの作品に対する評価のあらわれなのか、「映画」というジャンルそのものへの関心のなさを示すものなのか、判断しがたい。例えば、戸塚文卿は、レオン・パジェスの『日本廿六聖人殉教記』の翻訳の紹介文の中で、『二十六聖人』映画に言及しているが、それは、平山政十の「苦心になる」作品と評しているにとどまっている。「『日本二十六聖人殉教記』に就いて」『日本カトリック新聞』三二四号、一九三一年十二月二十七日。

(88) 『長崎カトリック教報』に掲載された平山の書簡には、内容に齟齬の認められる箇所がある。ある手紙（九七号、一九三二年十一月一日）で、滞米中、日本人の仏僧に興行の妨害を受けたことを語りながら、後の手紙（一〇五号、一九三三年三月一日）では、アメリカでは、仏教徒を含めて、全ての在米日本人から、映画が歓迎を受けたと書いている。

(89) 山本直樹「風景の（再）発見―伊丹万作と『新しい土』」岩本憲児編、前掲書、七〇―七一頁。

(90) 「平山政十氏の渡米」『長崎カトリック教報』八一号、一九三二年三月一日。同紙の八三号（一九三二年四月一日）に、杉山元、小磯国昭、谷正之などの陸軍及び外務省の関係者らに囲まれた平山の写真が掲載されている。『二十六聖人』映画が海外興行されている時期、日本では、衆議院に提出された「映画国策樹立ニ関スル建議案」が可決（一九三三年二月）され、「『日本』の表象問題がまさに『国策』として取り沙汰されるような」時期を迎えていた。山本直樹、前掲論文、七一頁。

(91) 「平山政十氏の近信」『長崎カトリック教報』一〇九号、一九三三年五月一日。

(92) 平山政十「自序」『蒙疆カトリック大観』蒙古聯合自治政府、一九三九年、九―一一頁。この本は、大空社のアジア学叢書（二一巻、一九九七年）で、復刻されている。

(93) 太田雄三「満州事変後の新渡戸稲造」前掲書。

(94) "Allocution de M. Dominic M. Hirayama à la salle des Promotions, Université Laval, Québec, 6 Janvier 1933," *Missions Franciscaines*, N° 2, Mars-Avril 1933, p.76.

(95) 「二十六聖人映画だより—第一信」『長崎カトリック教報』九三号、一九三二年九月一日。

(96) 池田敏雄『長崎キリシタンの精鋭 津和野・乙女峠の受難（高木仙右衛門、守山甚三郎）』中央出版社、一九六五年、三〇〇頁。

(97) Walsh, James Anthony., "The Twenty-Six martyrs of Japan," *The Field Afar*, July-August, 1932, pp.189-200. 朝鮮で『二十六聖人』映画が公開された時、この映画を鑑賞して、カトリックに関心を持ち始めた人々がいたことが、紹介されている。

(98) 「平山政十氏の近信」『長崎カトリック教報』一〇五号、一九三三年三月一日。

(99) 「二十六聖人映画だより—第一信」同上、九三号、一九三二年九月一日。

(100) 本作品のフランス語版とオランダ語版のフィルムでは、秀吉の催した饗宴の場面で、様々な日本の伝統芸による余興がおこなわれるが、これらは、明らかに海外の観客に日本文化の紹介を意図したものと考えられる。

(101) 「平山政十氏の米国便」同上、八五号、一九三二年五月一日。

(102) 難波専太郎『朝鮮風土記 上巻』（建設社、一九四二年）には、「平山政十氏の朝鮮武者修行」という文章が収められているが、これは、平山が一九〇二年に行った朝鮮北部地方への旅行に関する談話の記録である。ここで語られている平山と朝鮮人の関係は、いわば、開化した日本人と、開化していない朝鮮人のそれであり、平山が、当時、日本と朝鮮の関係を、〈文明〉と〈未開〉の二項的対立関係でとらえていたことが明らかである。呉林俊『日本人の朝鮮像』（合同出版、一九七三年、六九—七一頁）は、この一文を引用し、平山の朝鮮の人々に対する態度を「いたけだか」なものと問題視している。

(103) もっとも、当時は、植民地を保有していた西欧のカトリック教会でも、自国の植民地支配に疑問を持つものが多くはなかったこと、また、第一次世界大戦時、多くの西欧人神父が、その愛国心から、祖国の勝利を願っていたことを顧みれば、平山の活動が、当時の世界のカトリック教会の中でも、決して特別なものでもなかったことは確かである。

(104) アメリカの教会関係者の利益重視の傾向に関しては、以下を参照。J・T・エリス他（上智大学中世思想研究所編訳・監修）『キリスト教史』一〇巻、平凡社（平凡社ライブラリー）、一九九七年、二二三頁。

(105) 「平山政十氏の近信」『長崎カトリック教報』一〇五号、一九三三年三月一日。

(106) 平山自身の語るところでは、「アメリカ国内の学校で上演したのが百十七校、同時に講演、教会が九十七ヶ所、新教教会で五ヶ所、劇場で六回、新聞雑誌に記事を書いたのが七十回、観覧者総数十四万六千七百四十人、聖職者二千三百四十人（神父・童貞・神学生）」であった。「平山政十氏の近信」同上、一〇九号、一九三三年

五月一日。

(107) Clémentine, P., “Un grand film sur les premiers martyrs du Japon,” *Missions Franciscaines,* N° 1, Janvier-Février, 1933.

(108) 『ミッション・フランシスカン』誌は、同年の七・八月号で、映画の上映希望先を募集する文章を掲載しており、当地のフランシスコ会がこの映画に大きな好意を抱いていたことがうかがえる。“Un film sonore extraordinaire...,” *Ibid.,* N° 4, Juillet-Août, 1933.

(109) 「平山政十氏の近信」『長崎カトリック教報』一一二号、一九三三年六月十五日。

(110) 宇垣一成文書研究会編『宇垣一成関係文書』芙蓉書房出版、一九九五年、三七六頁。

(111) 「平山政十氏の通信」『長崎カトリック教報』一一六号、一九三三年八月十五日。

(112) フランス語版フィルムには、ブリュッセルのスタジオで、トーキー版が製作されたという字幕がある。また、オランダ語版、フランス語版の両フィルムに、それぞれ、斎藤実の名が、「現首相」として、映画の協賛者のクレジットにあげられていることから、時期的にみて、これらのフィルムは、平山が、ベルギー滞在中に製作編集したものであると考えられる。なお、この両外国語版フィルムでは、映画は、長崎における殉教の場面で終了しており、バチカンにおける列聖式の場面は省かれている。

(113) “Le film des XXVI martyrs japonais,” *Revue Missionnaire des jésuites belges,* Juillet 1933, p.290.

(114) Catrice, Paul., “Cinema et Missions,” *Missions Catholiques,* N° 3181, 1er Juin 1933, p.274.

(115) 「平山政十氏の通信」『長崎カトリック教報』一一六号、一九三三年八月十五日。

(116) ベルギー外務省文書館、バッソンピエール駐日大使発本国外務大臣宛報告書簡（一九三二年二月十八日、東京）。*Dossier Personnel, N° 94, Consulat de Belgique à Seoul,* N° 288/51. なお、バッソンピエール大使は、東京で行われた『二十六聖人』映画の試写会に招待されている。「殉教血史「日本廿六聖人映画」満都の血を湧す」『日本カトリック新聞』三一二号、一九三一年十月四日。

(117) ベルギー滞在中、平山は、あるカトリック経済学者の著作の翻訳をおこなっており、後、『カトリック』誌にその翻訳が掲載されている。ユジェーヌ・デュトワ（平山政十訳）「人道的経済論の提唱」『カトリック』一六巻、九号、一九三六年九月。

(118) 満州事変などの極東方面における国際状況の激変は、中国に利害関係を持つベルギー政府の注目を集めており、同国は、この時期、各国の動向を探りつつ、難局に対処していた。Servais, Olivier., “La Belgique et l’affaire du Mandchoukuo,” Paul Servais (ed.), *La diplomatie belge et l’Extrême-Orient: Trois études de cas (1930-1970),* Louvain-la-Neuve,: Academia-Bruylant, 2004. 磯見辰典、黒沢文貴、櫻井良樹『日本・ベルギー関係史』白水社、一九八九年、三七七頁。一九三〇年代のベルギーにおける日本のプロパガンダ活動を扱った研究に下記の書があるが、『二十六聖人』映画に関しては、全く触れられていない。あくまで一例にすぎないが、平山の興行活動が、ベルギーで行われていなかったか、あるいは、特に目立

つものではなかったことを示すものであろう。Lisoir, Hervé., *La Guerre sino-japonaise dans les années 30: Pressions et propagande en Belgique francophone*, Bruxelles: Archives communistes, 2001.

(119) 外務省外交資料館「本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件 第三巻、三、加特力教」大阪府知事報告「カトリック映画講演会開催に関する件」。

(120) ベルギー外務省文書館、バッソンピエール駐日大使発本国外務大臣宛報告書簡（一九三四年九月四日、東京）。*Dossier Personnel*, N° 94, Consulat de Belgique à Seoul, N° 1837 / E5 d'ordre 414.

(121) 「平山政十氏の通信」『長崎カトリック教報』一一六号、一九三三年八月十五日、「平山政十氏を送って」同上、一三三号、一九三四年五月一日。今回のわれわれの調査では、このエイドフォン映画会社と平山が結んだ契約内容や、作品の上映状況の規模もしくは有無に関して、具体的なことを知ることができなかった。ただ、当時のベルギーの代表的な宣教誌（*Bulletin de l'Union missionnaire du clerge*）などに、この映画の上映に関する記載が見当たらなかったこともあり、筆者は、この映画が、ヨーロッパで正式に一般公開される事はなかったという考えに傾いている。また、当時、エイドフォン映画会社などの活動を含む、ドイツ・カトリック教会の映画文化運動が、資金不足に悩まされていた事に関しては、下記の研究書の指摘がある。Dalton, Margaret Steig., *Catholicism, Popular Culture, and the Arts in Germany, 1880-1933*, Notre Dame, Indiana: University of Notre Dame Press, 2005, p.198.

(122) オランダ語版『二十六聖人』フィルムには、メッヘレンの聖心会のグループに、上映許可が与えられたことを記載する字幕があるので、同会によって、自主上映されていた可能性がある。ベルギー王立シネマテークは、フランス語版のフィルムを一九五五年にコレクションに加えているが、入手経路などに関する資料は残されていない。

(123) 著者が先に指摘した作中の豊臣秀吉の描き方は、キリスト教徒を迫害する人物が、根っからの悪人ではないことを示すものであるだけに、日本の史実に通じない外国人の観客には、さらに戸惑いを与えることになったのではないかと想像される。恐らく、海外の観客は、カトリック信徒が迫害を受ける後半部になって、はじめて十分な感情移入をすることができたであろう。